

国際理解教育

第38回
開発教育
全国研究集会

[ディー・ラボ]

d-lab

開発教育

2020

報告書

多文化共生

ぬちとほ
育成'学び

S
D
G
S



特定非営利活動法人
開発教育協会



目次

はじめに		1
開催概要		2
全体会	「ぬちどう宝」を育む学び	4
分科会	1 世界のウチナーンチュ！ー移民教材から考えるアイデンティティ	8
	2 伊江島・土地闘争の非暴力の闘い方から、現代の私たちは何が学べるか	10
	3 SDGsに教育でどう取り組むのか？気候変動を切り口に考える	12
	4 多文化共生って何だろう？！～ネパール人留学生と一緒に考える～	14
	5 沖縄の自然と観光開発～ヤンバルの森を歩いてみよう！～	16
	6 地域ですすめる SDGs ～沖縄、北海道、関西から	18
ワークショップ	1 島くとうばワークショップ	21
	2 「ひめゆり」から戦争体験を学び、伝えるために“私たち”ができること	22
オンラインツアー	ぬちぐすいまちまーいオンラインツアー	23
自主ラウンドテーブル	沖縄から「難民問題」を考える教材体験	25
	教育は未来の扉を開く？～「町の自習室」ができること～	26
	事例検討：ワークショップで学ぶ沖縄戦	28
	わったー泡盛で歴史・文化と交流がまざりあう！オンラインツアー	29
	オンラインツアー「街なかマングローブ、生きもの、人の暮らし」	30
	ワークショップ「今日はフェアトレードの日！？」	31
	金武魂を受け継ぐ若者たち「ちばりよー！うちなーにーせーたー」	32
	写真と映像からよみとくルワンダー視点を広げる問いづくり	33
	私が選んだソーシャル・アクションーアクションするから社会が変わるー	34
	SDGs 教育目標についての日本政府への提言書を作ろう・	35
実践事例・研究報告	蚊媒介性感染症対策における市民科学の実践と可能性	36
	公立高校の沖縄修学旅行～事前学習から事後学習まで～	37
	東アジア平和大使プログラム実践報告	38
	18歳成人時代の成人式と高校教育	39
	普遍的な「グローバルなもの見方」の育成についての考察	40
	言語教育とESDの融合：オンライン日本語教育の事例	41
	国際協力NGOの社会的実践への市民の参加機会	42
	コロナ禍におけるオンライン活動実践	43
参加者情報・アンケート集計結果		44
実行委員会の開催記録・委員紹介・振り返り		46

はじめに

本報告書は、d-lab2020（第38回開発教育全国研究集会）の各プログラムの実施記録および、参加者のアンケートや実行委員会の活動記録についてまとめたものです。

開発教育協会（DEAR）は、開発教育の実践や研究を広め、深めるために、d-lab（開発教育全国研究集会）を1983年より毎年開催しています。学校教育や社会教育、国際協力、地域の市民活動などの様々な場で開発教育を実践・研究している方、また関心がある方など、毎年約300名の関係者が一堂に会し、開発教育の実践・研究の成果や課題の共有をはじめ、人的な交流やネットワーキングをすすめてきました。

2020年度は、38回目にして初めて沖縄での開催となりました。当初は、2020年11月に沖縄県内の会場にて開催を予定していましたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響に伴い、2021年2月20日（土）～23日（火）に全面オンラインにて開催しました。

テーマは、「『ぬちどう宝（命こそ宝）』を育む学び」としました。沖縄は、かつて国内最大の地上戦を経験し、多くの尊い命を失われました。戦後の復興の中で、傷つき傷つけあった経験を経て、自らの文化を守り継承しながら、「ぬちどう宝（命こそ宝）」を育んできた背景があったからです。

2020年、コロナ禍の中で多くの人が傷つき、明るい未来を想像しがたい状況が続いています。私たちはこの経験から何を学ぶのか、公正で持続可能な社会をどのように創っていくのか、そのための学びはどうあるべきなのか。沖縄を通して「ぬちどう宝（命こそ宝）」を考え、実践していく貴重な時間となりました。

オンラインではあっても、30を超えるプログラムで、沖縄からの課題提起を中心に、全国の参加者と持続可能な社会や教育について熱い議論を繰り広げることができました。それができたのは、共催団体である沖縄NGOセンター（ONC）とd-lab2020実行委員会の協力があったからです。1年かけて、実行委員の方々の活動を学び、地域の開発や教育について考え、各企画に関して意見交換を行ってまいりました。本報告書にもその記録と、実行委員の振り返りを掲載いたしました。このプロセスがあったからこそ、「d-lab2020with 沖縄」が実現できました。

協力してくださった皆様、参加してくださった皆様に心よりお礼申し上げます。

認定NPO 法人開発教育協会（DEAR）

代表理事 湯本浩之

d-lab2020 (第 38 回開発教育全国研究集会) 開催概要

1. 会 期：2021年2月20日(土)～23日(火・祝)
2. 会 場：オンライン会議システム(ZOOM)を使用して開催
3. 主 催：d-lab2020 実行委員会、認定 NPO 法人開発教育協会、NPO 法人沖縄 NGO センター
4. 助 成：一般財団法人日本国際協力システム
5. 後 援：文部科学省、外務省、環境省、消費者庁、独立行政法人国際協力機構、沖縄県教育委員会、
国連広報センター、ESD 活動支援センター、株式会社沖縄タイムス社、株式会社琉球新報社、
一般社団法人 SDGs 市民社会ネットワーク、特定非営利活動法人関西 NGO 協議会、
特定非営利活動法人国際協力 NGO センター、一般財団法人自治体国際化協会、
公益社団法人青年海外協力協会(JOCA 沖縄)、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
6. 協 賛：NPO 法人アジア太平洋資料センター、SDGs × キャリア教育プロジェクト、株式会社国際旅行社

7. プログラム

【1日目】2月20日(土)

時間	内容
10:00～10:15	■開会式／オリエンテーション 挨拶：玉城直美(d-lab2020 実行委員長)、湯本浩之(DEAR 代表理事)
10:15～12:00	■オープニングパフォーマンス 「沖縄の文化・言葉・自己決定」 ゲスト：沖縄ハンズオン ■全体会 「ぬちどう宝(命こそ宝)を育む学び」 ゲスト：伊是名夏子(コラムニスト)、根間広人(沖縄ハンズオン)、玉城直美(沖縄キリスト教学院大学)
13:00～18:00	■ワークショップ体験(一コマ120分) A) 島くとうば体験ワークショップ(沖縄ハンズオン) B) 開発教育入門講座～パーム油のはなし(DEAR) C) 写真で学ぼう!地球の食卓(DEAR) ■自主ラウンドテーブル(一コマ70分×4コマ) ・沖縄から「難民問題」を考える教材体験 ・教育は未来の扉を開く?～「町の自習室」ができること～ ・事例検討:ワークショップで学ぶ沖縄戦 ・わった一泡盛で歴史・文化と交流がまざりあう!オンラインツアー ■実践事例・研究報告(一コマ30分×4コマ) ・蚊媒介性感染症対策における市民科学の実践と可能性 ・公立高校の沖縄修学旅行～事前学習から事後学習まで～ ・東アジア平和大使プログラム実践報告 ・18歳成人時代の成人式と高校教育
19:00～20:30	交流会(コザインターナショナルプラザ KIP) 挨拶：佐藤友紀(DEAR 副代表理事)

【2日目】2月21日(日)

時間	内容
10:00～12:00	■ワークショップ体験(一コマ120分) D)「ひめゆり」から戦争体験を学び、伝えるために“私たち”ができること(ひめゆり平和祈念資料館) E) プラスチックごみ(DEAR) F) スマホから考える世界・わたし・SDGs(DEAR)

時間	内容
13:00 ~ 17:00	<p>■自主ラウンドテーブル（一コマ 70 分× 6 コマ）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オンラインツアー「街なかマングローブ、生きもの、人の暮らし」 ・ワークショップ「今日はフェアトレードの日!？」 ・金武魂を受け継ぐ若者たち「ちばりよー！うちなーにーせーたー」 ・写真と映像からよみとくワンダー視点を広げる問いづくり ・私が選んだソーシャル・アクションーアクションするから社会が変わるー ・SDGs 教育目標についての日本政府への提言書を作ろう <p>■実践事例・研究報告（一コマ 30 分× 4 コマ）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・普遍的なグローバルなものの見方の育成についての考察 ・言語教育と ESD の融合：オンライン日本語教育の事例 ・国際協力 NGO の社会的実践への市民の参加機会 ・コロナ渦におけるオンライン活動実践

【3日目】 2月22日(月)

時間	内容
11:00 ~ 12:30	■ぬちぐすいまちまーいオンラインツアー 午前の部（株式会社国際旅行社）
13:30 ~ 16:00	■ぬちぐすいまちまーいオンラインツアー 午後の部&交流会（株式会社国際旅行社）

【4日目】 2月23日(火・祝)

時間	内容
10:00 ~ 13:00	<p>■課題別分科会</p> <p>○第1分科会 世界のウチナナンチュ！ー移民教材から考えるアイデンティティ ゲスト:比嘉アンドレス（名護市国際交流協会）、進行役:内山直美（南風原中学校）、屋良真弓（南風原小学校）</p> <p>○第2分科会 伊江島・土地闘争の非暴力の闘い方から、現代の私たちは何を学べるか ゲスト:安保由紀子、進行役:渡嘉敷紘子（一般財団法人わびあいの里）</p> <p>○第3分科会 SDGs に教育でどう取り組むのか？ー気候変動を切り口に考える ゲスト:高橋英恵（国際環境 NGO FoE Japan）、羽角章（神奈川県立高校非常勤講師、「新しい環境学習をつくるネットワーク」代表） コメンテーター:田中治彦（上智大学グローバルコンサーン研究所） 進行役:近藤牧子（DEAR 副代表理事）、松倉紗野香（DEAR 理事）</p>
14:00 ~ 17:00	<p>○第4分科会 多文化共生って何だろう?! ~ネパール人留学生と一緒に考える~ ゲスト:グルン スバス（沖縄ネパール友好協会 ONFA）、サンジブ・スレスタ（沖縄ネパール友好協会 ONFA） 進行役:オジャ ラックスマン（沖縄ネパール友好協会 ONFA）、大伸るみ子（多文化ネットワーク fu ふ! 沖縄）</p> <p>○第5分科会 沖縄の自然と観光開発~ヤンバルの森を歩いてみよう!~ ゲスト:佐々木 健志（琉球大学博物館（風樹館）） 進行役:鳥袋 美由紀（琉球大学博物館（風樹館））</p> <p>○第6分科会 地域ですすめる SDGs ~沖縄、北海道、関西から ゲスト:岩崎裕保（関西 NGO 協議会）、小泉雅弘（さっぽろ自由学校「遊」）、玉城直美（沖縄 NGO センター） 進行役:中村絵乃（DEAR）、近藤牧子（DEAR 副代表理事）</p>
17:15 ~ 18:30	<p>■ふりかえり会、閉会式</p> <p>挨拶:奥山有希（沖縄 NGO センター）、近藤牧子（DEAR 副代表理事）</p>

「ぬちどう宝」を育む学び

ゲスト：伊是名夏子、根間広人、玉城直美 進行役：中村絵乃
 日時：2月20日(土) 10:00～12:00 参加人数：約80名

【ゲスト】

伊是名 夏子 (いぜな・なつこ)

コラムニスト。1982年生。沖縄生まれ、沖縄育ち、神奈川県在住。著書『ママは身長100cm』（デイスカヴァー・トゥエンティワン）。東京新聞・中日新聞、ハフポスト、琉球新報等で連載中。骨の弱い障害「骨形成不全症」で電動車いすを使用。身長100cm、体重20kgとコンパクト。右耳が聞こえない。ハイリスクな妊娠出産を乗り越え、7歳と5歳の子育てを、総勢15人のヘルパーや、ボランティア、ファミリーサポート、ママ友、近所の方々に支えながらこなす。



根間 広人 (ねま・ひろと)

NPO法人沖縄ハンズオン。はいさい!初みていうがなびら。我んねー根間広人んでいいちよーいびーん。琉球大学大学院国際言語文化専攻。沖縄ハンズオンNPOユース倶楽部に所属し、琉球諸語(島くとぅば)の復興・普及を目的に研究と地域社会貢献活動を行っています。沖縄タイムス通信員。ゆたさるぐとぅうにげーさびら!よろしくお願ひ致します。



玉城 直美 (たましろ・なおみ)

NPO法人沖縄NGOセンター・沖縄キリスト教学院大学。沖縄NGOセンターをアルバイトスタッフで関わり、気が付くと理事長になっていました。沖縄の開発問題をどうしたら教室や生活の中で考えられるのか日々活動中。SDGs、主権者教育、ジェンダー、等々興味関心は尽きない。



【進行役】中村絵乃 (DEAR)

【実施内容】

1. 「ぬちどう宝」を育む学びとは? (玉城さん)

d-labを沖縄で開催するにあたり、18年前に沖縄で開催した「開発教育地域セミナー」*1に立ち戻ってみました。『世界がもし100人の村だったら』(マガジンハウス)の対訳者、ダグラス・ラミスさんを招いて実施しました。

「昔の人は言いました。巡り行くもの、また巡り還る、と。だから

あなたは、深ぶかと歌ってください。のびやかに踊ってください。心をこめて生きてください。たとえあなたが、傷ついても傷ついたことなどないかのように愛してください」-『100人村』のこの一節には、歌い踊りながら復興してきた沖縄の歩みが表現されています。沖縄戦の後、生き延びてきた方々は「ぬちどう宝(命こそ宝)」という言葉の原点に、平和を希求してきました。そこで、『「ぬちどう宝」を育む学び』をd-labのテーマとすることにしました。

沖縄らしい開発教育を発信するため、沖縄らしさとは何だろうと考えました。沖縄には独自の料理や言葉などの豊かな文化があります。一方、「日本の人間の安全保障指標2018」*2を見ると、沖縄県は総合指数45位にとどまっており、所得や進学率、子どもの貧困、オーバーツーリズム、基地問題などの課題を抱えています。わたしも全国から参加の皆様も「地域」で暮らしているという観点から、地域課題への取組みという共通の視点が持てるのではないのでしょうか。本日は、地域から様々な発信や活動をされている3人でゆんたく(沖縄語:おしゃべりの意味)をしていきます。

2. ゲストの自己紹介と問題意識の共有

(1) 根間さん

はいさい!沖縄ハンズオン・ユース倶楽部では、小学生から大学生のメンバーが参加し、地域・社会貢献、沖縄の歴史・文化継承、ピアラーニング学習の3つの柱で活動を行っています。私も、ユース倶楽部と出会い、沖縄の歴史や「島くとぅば(島言葉)」の大切さを学んできました。

ユース倶楽部では、「島くとぅば」を用いたオペレッタ劇を行っています。琉球王国の後、支配者が日本・アメリカ・日本と変わってきた中で、言葉を奪われた沖縄の歴史や社会問題を取り上げています。演劇を通して、人権とは何か、子どもとしてあるべき姿は何かを深く考える機会になりました。

昨年からのコロナ禍で、人との縁を回復するため、地域の方々と有機野菜を育てています。土に触れ、種を蒔き育てる体験を通じて、子どもたちは食べ物や服がどこからきているか、自分たちが地球の一員であることを感じるができます。児童センターと連携し、フードロス問題や、枯れ葉や生ゴミを堆肥として土に返す活動も進めています。

(2) 伊是名さん

沖縄出身で、現在は神奈川県川崎市に2人の子どもとパートナーの家族4人で暮らしています。骨の折れやすい障害があり、車いすで生活しています。

SDGsが私の活動テーマのひとつです。学生時代には、カンボジアの孤児支援をしていました。当時は外国で困っている人のことに目が向いていましたが、沖縄にも貧困などの社会問題があることに気づき、日本国内や沖縄に目を向けるようになりました。現在、東京新聞やハフポストなどに自分自身の生き方や、生きていきたい社会についてコラムを書いています。『ママは身長100cm』という本も出版しました。

沖縄の文化が好きで、結婚式では紅型のウエディングドレスを着ました。子どもたちに沖縄のことを伝えたいと、ムーチャー（月桃の葉に包まれた餅）を送ってもらい、無病息災を願って歳の数の餅をつなげて飾りました。

福祉制度を利用し毎日10時間ヘルパーに来てもらい、料理・送迎・掃除などを一緒に行っています。ヘルパーとの生活では、失敗を責めない、相手を観察し良いところを伝える、予定を細かく伝えて見通しを持ってもらう、一緒にご飯を食べる、相手を信頼することなどを大切にしています。

コロナ禍の一年は大変でしたが、先の見えない毎日は、話し合いや予定の変更・工夫が必要になってくる私たち障害者の生活に似ていると気づきました。また、リモートワークの増加や小規模での学校行事開催など、暮らし方の選択肢が増えている今に少し希望を感じ、SDGsのテーマ「誰一人取り残さない」とつながっていくように思います。

(3) 玉城さん

大学卒業時、地域の中で働く選択肢があまりなく、青年海外協力隊でヨルダンに行きました。ヨルダンで、「自分の問題を解決できないあなたがここで何をやるの、地域や家族を大切にしてください」と言われたことをきっかけに、帰国後は沖縄での活動を始めました。

NGO活動当初、開発教育との出会いもあり、沖縄の地域問題を解決することが地球規模の問題解決につながることを実感し、沖縄の社会問題と向き合ってきました。私にとっては米軍基地の削減が平和な社会づくりの前提ですが、沖縄社会からはジェンダー、障害者、外国人など、様々な問題が見えてきます。そして、沖縄は軍隊を受け入れざるを得ない構造的暴力の中に日々晒されていると感じているため、良い方向に向かわせたいと思っています。

沖縄NGOセンターでは、沖縄移民の問題などを扱っています。琉球から日本の中の沖縄になる中で、なぜ多くの人々が外貨を稼ぎに行かざるを得なかったのかを考える教材を作っています。また、「やさしい日本語」の普及や大学生と一緒に選挙を考えるワークショップを行ったり、ブラックバイト問題を演劇仕立てで考えたりしています。個人的には、基地問題を含めた開発問題にどうコミットできるかを考えています。そして、沖縄の未来について意見できる若者を育てたいと思っています。学べば学ぶほど、沖縄と日本の対立軸が生まれてきます。開発教育で対立問題を乗り越えられるとは思っていますが、まだ具体的な解決策が持っているわけではありません。

3. 教育や開発教育について思うところ

(1) 島くとうばを学ぶ機会を(根間さん)

言葉は、先祖が引き継いできた歴史や習慣を学ぶ入り口になります。ユース倶楽部では、祖父・祖母の名前や家の中からルーツを見直してみよう、家系図を見てもよと呼びかけています。学校では島くとうばを学ぶ機会や歴史・背景に触れる機会は少ないので、学校と公民館

など地域の連携が重要です。沖縄ハンズオンの活動に携わってから、自分自身の立ち位置が見え、経済的な幸せではなく、精神的な幸福感、ウェルビーイングを感じることに身についてきていると感じます。

(2) 先住民族の権利と基地問題(玉城さん)

学校で島くとうばを教えないのは、政府が沖縄の人々を先住民族と認めていないという背景があります。一方、国連は沖縄の人々を先住民族であると認めるよう勧告を出しています*3。先住民族であれば、自らが言語や土地利用を決められます。しかし、沖縄には基地問題があるため、政府はアイヌ民族を先住民族と認めても、沖縄は認めない立場です。ユネスコも島くとうばを絶滅の危機に瀕している言語に指定しています。沖縄の学校教育によるものではなく、日本政府の立場に基づき、教えられていないとも言えます。

(3) 大人が生き方を見直さないと子どもにも伝わらない(伊是名さん)

沖縄県外で暮らし始めて、世界や日本の歴史は習っても、琉球の歴史を習う機会がなく、子どもが誇りを持ってないと思うようになりました。沖縄の子どもたちにも沖縄を誇りに思ってもらいたいと思っています。

若い人や子どもたちが幸せに生きられると社会は変わる、と常々思っています。子どものママ友と話をすると、「子どもにはいい教育を受けさせたい」、「幅広い選択肢を用意したい」と教育熱心です。子どもに願いをかけるのはいいですが、私たち大人が男女のパートナーシップや働き方など、毎日の生き方を見直さないと子どもの世代に伝わりません。私たちが変わらないので、世の中は変わっていかないのです。お互いが助け合い生きていく姿を子どもに見せ、助け合うことはいいことだと伝えていきます。

(4) 方言札の負の歴史から(根間さん)

教育の負の構造の例として、かつて沖縄では方言をしゃべると罰として「方言札」*4をかけることが強制されました。罰を受け、共通語を使えと言われることで、自分自身の言葉、文化を否定していました。社会を変えていくとはその構造を変えていくことだと思います。

(5) 開発教育を通じた地域間の連帯(玉城さん)

沖縄にある多くの問題は、沖縄だけの問題ではなく日本全体の問題でもあります。月間現金給与総額や大学・高校進学率が全国最下位であり、母子世帯割合は第一位という数字を見ると絶望的になりますが、幸福感や生きがいを感じている比率は7割と高く、経済的に厳しくても希望を感じている沖縄の人々の姿は、途上国の人々の生き方と通じると思います。観光や料理など消費される沖縄や独特の言葉・文化だけではなく、助け合い幸せを感じられる社会のつながりを大切に、県外や世界のウチナンチュと共に生きていきたいと思っています。基地問題だけではなく、様々な地域課題を共有しながら、開発教育を通じてそれぞれの地域と連帯していきたいです。

(6) 相手が大変な時に受け入れる心(伊是名さん)

貧困の中にいるのに幸せを感じられるというのは素敵であり、生きる力だと思います。私は体がきつくなるとすぐに横になって休みます。県外の人たちは私を見て「大丈夫?」と大きげに心配するので、なかなか「疲れた」と言いにくいのですが、沖縄の友達は「休んだら」とあっさりとした反応です。

相手が大変な時に深刻にならず、受け入れる心があると感じています。人を批判しないで受け入れる、お互い幸せだからそれでいい、という生きる希望や人とのつながりを持つ視点が沖縄の人にあると思っています。

(7) 生き抜いてきた人々の思い(根間さん)

「ぬちどう宝」という言葉には、沖縄戦の後、生き抜いてきた人々の思いを感じます。沖縄には、「助け合う」という意味の言葉が5つ程あります。助け合う状況により違う言葉を使い、受け入れる心、思いやりを育てる沖縄が大切にしている精神があります。

(8) 命があれば幸せと言い合える機会を(伊是名さん)

沖縄では子どもが産まれたら、家族だけではなく地域で祝う文化、子どもの名前の札を壁に貼るなど幸せを分かち合う文化があります。生まれるだけでいい、命が大切、という思いが背景にあります。しかし、実際には貧困など厳しい現実と直面すると、その思いを忘れがちになります。大人になっても、命があれば幸せと言い合える機会を沖縄の人だけでなく、日本中・世界中の人にも取り戻したいです。

(9) 相手を追い詰めない文化(玉城さん)

幸福度が高いのは、相手を追い詰めないという文化に根差しているかもしれません。命こそあれば大丈夫だよ、と教えられてきたことが強さにつながっていると思います。障害者でも、男でも女でも、命の大切さは平等である、との意識を高めていくことが大切です。沖縄、日本の人たちみんなで考えていきたいです。

●脚注

*1 開発教育地域セミナー:地域における開発教育の推進とネットワークづくりのため、外務省の受託事業として1992年度より2003年度まで、全国44都道府県で合計64回開催された。沖縄大会は2003年1月に開催。

*2 日本の人間の安全保障指標:「人間の安全保障」フォーラムを中心とした学識経験者らで構成するプロジェクトチームが作成したもの。
<https://www.hsf.jp/>

*3 2008年・14年に国連の「自由権規約委員会」が、2010・14・18年に「人権差別撤廃委員会」が琉球・沖縄の人々を先住民と認め、権利や伝統文化、言語を保障するよう求める旨の勧告を行っている。

*4 方言札:方言を話し生徒に札をかけさせて見せしめにする罰。標準語の使用を強制するために用いられた。

【参加者の感想】

・3人のパネリストの方が、それぞれの場で、それぞれのペースで、自分らしく生きながら世界のことについて考え、行動されていることに感激しました。

・沖縄は人間の安全保障の数字は低いのに、幸福度は低くないのはなぜなんだろうかと考えました。貧困がお金だけの問題ではなく、家族や人間関係などのセーフティーネットがない状態とすると、まだ沖縄には人のつながりが残っていて、つながりのなかで自分の居場所や生

きがいを得ている人が少なくないということなのかと。沖縄の人が相手を受け入れる、批判しない、過剰に反応しない、それは実は無関心なのかも、というお話も、深刻に考えないようにするという思考のパターンなのかな?など、聞いていて、いろいろ考えました。

・「ぬちどう宝」というテーマは沖縄における開発問題に加えて、コロナ禍の今、参加者に問いかけるテーマだと思いました。根間さんの歴史・文化・伝統からの学びを大切にしながら次世代のアクションを創っている活動、伊是名さんの日常の疑問・工夫を、私たちや世界の課題解決へのヒントにわかりやすくつなげて下さったお話し、玉城さんの長年抱いてきた問題提起やあつい思い。3人のお話しが「ゆんたく」つながって、多くの視点や学びを得ることができました。

【報告者】阿部秀樹 (DEAR 理事)

※「DEAR NEWS Vol.20」(DEAR、2021年4月発行)の特集に掲載した報告を一部編集し、参加者の感想を加筆しています。

世界のウチナンチュ！ 移民教材から考えるアイデンティティ

ゲスト：比嘉アンドレス 進行役：内山直美、屋良真弓
日時：2月23日(火) 10:00～13:00 参加人数：27名

【ゲスト】

比嘉 アンドレス (ひが・あんどれす)

アルゼンチン・ブエノスアイレス生まれの沖縄日系3世。名桜大学大学院を修了し、現在は名護市国際交流協会に勤務。2015年に「世界ウチナンチュ学生サミット」を立ち上げ、2016年に「世界ウチナンチュの日」を制定、2017年に「国際日系デー」を制定。将来、万国津梁センターを立ち上げる夢を目指している。

【進行役】

内山 直美 (南風原中学校教頭)

屋良 真弓 (南風原小学校教諭)

1. 背景とねらい

①子どもたちとアイデンティティを考える

沖縄の移民についての教材を体験する中で“アイデンティティ”とは、“地域のことを学ぶ意義とは”などについて参加者とともに考える。

②系統性をもって移民を学ぶ(移民教材の活用方法)

内山からの提案(ワークショップ)は、中学1年生～中学3年生の学年を跨いだカリキュラムである。そうすることで生徒たちは、カリキュラムの一貫したテーマである“沖縄に誇りを持つ”ことについて毎年考えるきっかけをもらう。場当たりの実践ではなく、系統性をもって学ぶ良さや意義が見えてきたのではないかと。発達年齢に応じた“沖縄への誇り”を捉え、自己を振り返ったり、仲間と交流したりすることで、考えが豊かなものになっていくようである。

③教育課程の中に移民教材をどう位置づけるのか、という提案

既存の教育課程の中に、移民教材を扱う場面は想定されていない。しかし、児童・生徒らがそれらのものから学べるものを見てみると、教科・領域のねらいに合致する事柄がとても多い。また地域の教材という事もあり、自分事として親近感を持って参加している児童・生徒が多い。つまり、学びの主体者となって意欲的に学んでいるのである。教科や単元の目標を踏まえて、有機的に紐づけすることで、多くの学校での実践につながると考える。

2. プログラム概要

プログラムは、大きく3つに分かれており、まずはじめの2コマは、中学校で実践されたワークショップを行った。移民1世に関するフォトランゲージを体験。その後、沖縄戦直後の沖縄と移民先のハワイとのつながりに関する紙芝居を体験した。また、3コマ目は、小学校で実践したワークショップを行った。5年に1度開催される

「世界のウチナンチュ大会」について考える“ランキング”を体験後、10月30日の「世界のウチナンチュの日」制定に貢献した比嘉アンドレスさんがゲストスピーカーとして登場し、参加者との交流を行った。

3. 実施内容

(1) なぜ、世界のウチナンチュは沖縄を誇りに思うのか

■ねらい：世界のウチナンチュ大会の映像を通して、世界のウチナンチュが5年に1度沖縄に帰る理由を考える。また、沖縄が移民県であると同時に、沖縄アイデンティティを求める県系人の気持ちを考えることで、世界における沖縄の可能性を考える。

■対象者：中学1年生

■具体的な流れ：

- ①動画を視聴し、「なぜ、世界のウチナンチュは沖縄を誇りに思うのか?」を問いかける。
- ②フォトランゲージを通して、グループで移民者の生活を考える。
- ③日系ペルー人3世のアルベルト城間さんによる歌「片手に三線を」を聴く。
- ④個人で沖縄を誇りに思う理由を考える。

(2) 世界のウチナンチュはどのように活躍しているのか

■ねらい：世界のウチナンチュが移民を開始して100年以上になり、2世以降の人々の活躍や思いを知ることで、移民先でも沖縄を大切にする姿勢を学ぶ。ハワイにいるウチナンチュ達が沖縄を大切にしたい気持ちに気づいてもらう。世界のウチナンチュの活躍を知り沖縄の可能性を探る。

■対象者：中学2年生

■具体的な流れ：

- ①グループに分かれて、移民先のウチナンチュの写真を組み合わせて紙芝居をつくり、ストーリーを考える。
- ②全体共有しながら、写真を説明。比嘉太郎とハワイのウチナンチュがどんな気持ちで豚を送ったのかを考える。
- ③感想を共有。



出典：『レッツスタディー！世界のウチナンチュ～移民教材を通して学ぶ多文化共生』（沖縄 NGO センター、2017 年）

(3) あなたもわたしも世界のウチナンチュ～世界のウチナンチュ宣言

■ねらい：世界のウチナンチュ大会の目的や意義を理解し、「世界のウチナンチュの日」宣言文をじっくり読むことで、世界のウチナンチュ大会への理解とウチナンチュとしての誇りを高める。

■対象者：小学校6年生

■具体的な流れ：

- ①ウチナンチュ紙芝居動画を視聴。
- ②世界のウチナンチュ大会を実施することで大切だと思うことをランキング。
- ②ウチナンチュ宣言動画を見ながら、宣言文を読む。
- ③比嘉アンドレスさんのお話を聞く。

【比嘉アンドレスさんによる、世界のウチナンチュの日についてのお話】

①なぜウチナンチュの日を制定しようと思ったのか。

沖縄では慰霊の日と日本復帰の日が大事な日だが、喜ばしい日ではなかった。だから、喜ばしい日、鳥をあげて祝う日をつくりたかったから、つくりましたという事になった。

②移民者の子どもたちがいつか仏壇やお墓に手を合わせるために（うーとーとするために）沖縄へ来るが、なぜアンドレスさんは沖縄に来て残ったのか。

約12年前にアルゼンチンから来ました。明桜大学に入学。アルゼンチンで通っていた大学の授業料を払うために出稼ぎに時々沖縄へ来ていた。ある程度お金が貯まったので、もう最後の出稼ぎというつもりで沖縄に来た。「人生に一度は沖縄に行こう」という言葉がある。最初に沖縄に来た理由は、一つは見たことのない家族に会うこと、もう一つはご先祖様に挨拶すること。那覇空港に到着したときから、前から会っていたかのような雰囲気です。

海外と沖縄の架け橋になりたいという思いで沖縄に残った。ペルーの沖縄日系の人と団体をつくった。5～6年かかった。世界ウチナンチュの日の制定が一番の大きな仕事。

③地元へのアイデンティティ、子どもたちへの継承について。

人間にとってのアイデンティティとは。ウチナンチュであること、日本人であること。地域や国に限らず、好きなこと、好きなものもその人なりのアイデンティティ。その気持ち（アイデンティティ）を大切にできる子どもたちになってほしい。自分を愛するということ！

ウチナンチュとしてのアイデンティティから生まれたアイデア。ウチナンチュは必ずしも沖縄生まれ、沖縄にルーツのある人だけではなく、沖縄と縁のあった人全員をハグして抱きしめてウチナンチュとした。そうしないと、ウチナンチュではない人を蚊帳の外に置くような組織になってしまう。

アイデンティティのことはかなり調べた。私たちの考えるアイデンティティは一番シンプル。自分の存在を愛すること。地球で頑張っている、ということに愛すること。自分を愛していないと、まわりの人を愛することも難しい。

宣言文はこれまで持っていた気持ちを少し明確に文章にただけ。相手のアイデンティティを理解しようとするのが大切。最初は一番近いところから始めると良い。例えば、女性として、男性としてのアイデンティティ。それを大切にして相手のアイデンティティを受け入れることが大切。

4. 参加者の反応や感想

・学校での実践報告もあったので、児童たちの感想も垣間見ることができ、盛りだくさんの情報といろんな角度から移民の歴史を知ることができた。

・沖縄の移民の歴史を自分のアイデンティティについて考える活動に結びつけた素晴らしい取り組み（教材）である。教材体験を通して知識を得ること（インプット）と話し合い（アウトプット）のバランスも非常によかった。

・ウチナンチュを沖縄に関心を寄せている人とリフレームする発想に賛同したいと思った。世界のウチナンチュ大会について、初めて知った。沖縄の歴史とネットワークの深さに感動した。

・こうした実践を通じて沖縄の子どもたちの自尊感情が高まること、これは他の地域にも通じるものと期待が高まりました。

5. 発表者の感想と今後の抱負

・勤務する学校や県内のワークショップでの開催とは違い、世界のウチナンチュのことをどのように紹介するか悩んだが、全国から参加した方々に興味を持って頂き感謝している。自分の足下を確認することはすごく大事なことでありますし、そのような授業を今後も展開できるよう取り組みたい。（内山）

・全国の開発教育に携わっている方々とつながり、率直な意見交換が出来たことがとてもよかった。また、今回扱った教材が沖縄の移民ということで、普段実践しているワークショップを県外の方に体験してもらって感想を聞いたことで、今後も継続して実践していきたいという意欲につながった。（屋良）

【報告者】内山直美、屋良真弓

伊江島・土地闘争の非暴力の闘い方から、 現代の私たちは何が学べるか

ゲスト：安保由紀子 進行役：渡嘉敷（池田）紘子

日時：2月23日（火）10:00～13:00 参加人数：36名

【ゲスト】

安保 由紀子（あんぼ・ゆきこ）

一般財団法人わびあいの里支援者。1972年兵庫県生まれ。1999年 JICA 青年海外協力隊員としてヴェヌアツ共和国に派遣され、帰国後 NGO ボランティアとして活動。2008年伊江島へ移住。2013年から2020年まで、わびあいの里に勤務。島の案内や阿波根昌鴻資料の発刊、鳥唄の普及に携わる。

【進行役】

渡嘉敷（池田） 紘子（とかしき／いけだ・ひろこ）

一般財団法人わびあいの里監事。2006年沖縄国際大学卒業。在学中に石原昌家平和学ゼミナールより、「伊江島解説書戦中・戦後平和ガイドマップ」を編集する。2002年から始まった「阿波根昌鴻資料調査会」メンバー。現在、同法人監査。（公社）青年海外協力協会（JOCA）職員。

1. 分科会を実施した背景とねらい ～歴史「から」学ぶことへの試み～

これまでの平和学習は、資料館の見学や体験者の話を聞いて質疑を行うという受け身のものが主だったが、戦争体験者が減っていく中で、戦争の「継承者」がどのように歴史を繋いでいけば良いか、これからの平和学習のあり方として戦争「から」現代社会の生き方を考えていくにはどのようなアプローチをすれば良いのだろうか、様々な方面から検討が始まっている。そうした兆候を受け今回の分科会では、歴史から何を学んでいくのか、戦後の伊江島に焦点を当てて考えていった。

沖縄県は1945年にアジア太平洋戦争の敗戦後、米軍の統治下に置かれた。1950年代、本土復帰を目指して沖縄全域で「島ぐるみ闘争」が起こったのだが、その闘争に大きな影響を与えたのが、伊江島の農民たちの非暴力の抵抗だった。駐留したアメリカ軍に土地をとられた農民たちは、生きるための闘いの中で「陳情規定」を作り、米軍や琉球政府と交渉していく。今回はその陳情規定を題材に、今の私たちの身近な生活の中で活かしていけることはないか、歴史を参考にどのように「平和」を作っていくかを考えることをテーマに分科会を行った。

2. 進め方

前半ではスライドを使って沖縄戦の概要を学び、フォトランゲージを2回行って、①戦後、米軍に統治された伊江島で起こったこと、②農民（住民）たちはどのような行動を起こしていったか、についてグループで考えた。後半はワークシートを用いて「陳情規定」について読み込み、規定にどのような思いが込められているのか、その背

景やねらいを想像しつつ、当時の闘い方から私たちを取り巻く現代社会に参考にできることはないかを意見交換していった。

3. プログラム内容

まずテーマとなる伊江島について、概要から説明していった。伊江島は沖縄本島北部に位置し、美ら海水族館で知られる本部町から船で30分ほどの日帰りで行ける離島で、観光客や修学旅行生の訪れも多い。そこに、一般財団法人わびあいの里の平和資料館、初代理事長である、故阿波根昌鴻が設立したヌチドゥッタカラの家があり、平和を語る場、平和学習の場として利用されている。

1) 沖縄戦の縮図と言われる伊江島の戦争

①日米軍の間には圧倒的な兵力の差があったこと、②沖縄戦は「捨て石作戦」であり、日本は降伏することが許されなかったため持久戦となったこと、③多くの住民が戦闘に巻き込まれ、降伏できずに自死を強制されたこと等、沖縄戦の特徴を説明した。そして伊江島も凄惨な攻撃を受けて、「沖縄戦の縮図」と称されることを資料と共に見ていった。

2) あまり知られていない沖縄戦後の住民の生活、米軍統治下の様子

戦後人々の生活にどのような変化が起きていったかをフォトランゲージの手法で考えていった。写真はすべて、故阿波根氏が撮影したものであり、戦後、強制的に他地域へ移送された伊江島の住民が、2年後に伊江島へ戻って来てからの様子を写したものだ。



© 一般財団法人わびあいの里

伊江島では戦後、米軍がブルドーザーで畑を壊し、銃剣をふりかざして島民の土地を取り上げていったこと、その時に土地を取り上げられた人は米軍が用意したテントに住むことになったことなどが伝えられた。

土地が取り上げられたことで作物を育てられず（当時ほとんどが農家だった）、栄養状態も悪くなり、追い詰められていた農民の人たち

がどのような行動を起こしたのか、2回目のフォトランゲージに移った。



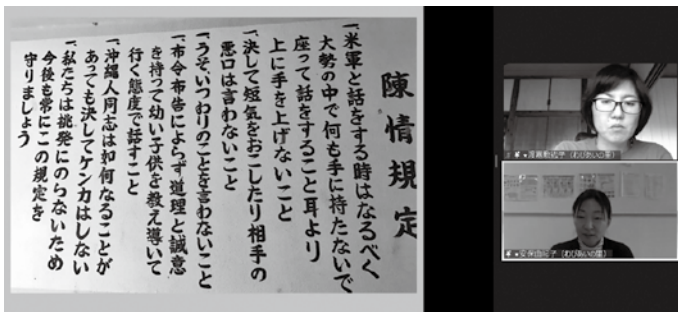
© 一般財団法人わびあいの里

伊江島の農民たちは、自分たちの窮状を訴えるために、沖縄本島に陳情へ行ったこと、そのときの様子が解説された。その際に、沖縄本島の土地を取り上げられた別の地域へ行って情報共有したり、新聞社に行ったり、写真を撮ったり、日記を書いたり、計画的な行動や意識して記録を残したことが調査の結果からわかってきている。

この間、伊江島に残って畑の世話をする人もおり、那覇に陳情に行く人、伊江島で起きたことを日記に書き起こす人、というように役割分担をし、すべて記録に残している。それらの記録を文字起こした『真謝日記』『陳情日記』『爆弾日記』が発刊され、記憶の伝承に繋げていることが紹介された。

3) ワークシートで歴史から現代を考える

このような陳情行動の中で、伊江島の農民は、琉球政府や米軍と交渉するために「陳情規定」を作っていた。農民たちは、相手が鬼畜であるなら、自分たちは人間になろう、あいさつをして当たり前のことをしようと決め、取り決めに定めた。



陳情規定

ワークシートを用いて陳情規定全文に目を通し、グループごとに、印象に残る規定やその理由について共有していった。そして、ワークシートの設問では、現代の自分たちの周りにも相手が巨大で力ではかなわない、でも、自分らしく生きていくために状況を変えていきたいことがないか、陳情規定や農民たちの闘い方から、どんなことが参考にできるのかを意見交換しようとして用意していたが、なかなか今の社会と照らし合わせて考えるのは難しく、陳情規定を含めて農民たちの行動についての感想共有に終わったところがほとんどだった。

4. 参加者の反応や感想(アンケートなど)

本分科会をきっかけに土地闘争を始めて知った人、以前伊江島を訪れたことのある人、自身も平和活動に取り組んでいる人など、様々

な立場からの参加者がおり、多くの感想が寄せられた。参加者同士考える時間が多く気づきが多かったという感想がほとんどだった一方で、もう少し知識の共有を期待していたという意見もあった。

〈参加者のアンケートより〉

・日本国内でもこれほど精神性が豊かな活動があることを知り、誇りを感じました。

・新しい知識、また考えを深める、ワークショップらしい学びができました。オンラインでの進行はとても難しいと思いますがスムーズで話しやすかったです。現地へ赴きたくなりました。伊江島から得たはずの学びは50、60年経った今でもあまり変わっていないように感じます。Black Lives Matter、基地問題、ヘリパッド問題、香港の民主化運動など・・・。

・伊江島の非暴力運動について、「いま」と照らし合わせて、私たちの行動に何を活かしていけるのかを改めて考える機会となりました。

・他の参加者のコメントが大変気づきの多いものだったのでワークショップ形式は良かったのですが、正直参加者の知見が進行の方の話を上回っていた気がしました。当時の断片的なエピソードではなく、写真の背景、問題の構造などをもう少し深く聞きたかったです。

5. 実践に対する評価、発表者の感想、今後の課題や抱負

伊江島内で歴史を語ったり、資料館の案内や写真の解説をしたりしたことはあったものの、法人としてこうした場で阿波根氏の写真を使ってワークショップを行うのは初めての試みだった。

沖縄戦に加えて戦後史を学ぶことが、今なお続く米軍基地問題、安全保障や新基地建設問題を考える上で欠かせないことである。今回の分科会を通して、伊江島の土地闘争で起こったことを改めて学び直し、具体的なエピソードを入れるべく当時の話を体験者から聞くなどできたことは、発表者として大きな収穫だった。ただ、質問に答え切れない場もあり、継承者として学びが足りていないことを痛感する場でもあった。

また、今回歴史を紹介し、当時の精神性を学ぶことはある程度できたが、そこから何を現代に繋げていくかという点については不十分だったと感じている。参加者の知見や経験によっても変わってくる事柄であり、今後、戦争を「過去」と捉える世代へ平和学習を実施していくことを考えると、設問や問いかけ方、構成を再考する必要がある。

最後に、参加者の一人からとても励みになる言葉を頂いたので紹介したい。

伊江島のわびあいの里は何度か訪ねたことがあり、お元気な頃の阿波根さんにもお会いしました。若い方が阿波根さんの精神を引き継いで、このようなワークショップを企画されたことを心強く思います。「沖縄の戦後について何も知らないことを痛感した」という他県の方の感想もあり、さまざまな工夫をして伝えていかなければ、自分もまだまだ知らないことばかりだなあ、とたくさんの宿題をいただいた気がします。

【報告者】 渡嘉敷 絃子

SDGs に教育でどう取り組むのか？ ～気候変動を切り口に考える～

ゲスト：高橋英恵、羽角章 コメンテーター：田中治彦 進行役：近藤牧子、松倉紗野香
日時：2月23日(火) 10:00～13:00 参加人数：37名

【ゲスト】

高橋 英恵 (たかはし・はなえ)

2018年より国際環境 NGO FoE Japan スタッフ。横須賀石炭火力発電所の新設中止を求める運動、国際気候変動交渉のフォロー等を行っている。

羽角 章 (はすみ・あきら)

広島大学大学院理学研究科物理学専攻博士課程後期を1982年に中退し、神奈川県立高校の教諭となる。以後2018年3月まで高校教諭を勤め、同年より非常勤講師。著書：『日本の若者はなぜ社会的エネルギーを失ったのか 隠れたカリキュラムを中心概念として』（七つ森書館、2019年）など。

【コメンテーター】

田中治彦 (上智大学グローバルコンサーン研究所)

【進行役】

近藤牧子 (DEAR 副代表理事・大学講師)

松倉紗野香 (DEAR 理事・埼玉県中学校教諭)

1. 本分科会について

本分科会は、昨年(2019)度分科会における「SDGsの基本理念を考える～『ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら』を事例に」に引き続き、DEAR内「SDGsと開発教育研究会」が主催した分科会である。SDGs全体の理念を考えた昨年度から、今年度は、具体的課題として気候変動を切り口に、SDGsの教育での取り組み方について考えることを目的とした。

2. 参加者の意識や取り組み

～「気候変動問題に何してる?したい?」

最初に、自己紹介(名前と今いる場所)と「気候変動問題に対してやったことのあること、やっていきたいこと」について話していただいた。

資料として、昨年(2020年) DEARから発行された『開発教育アクティビティ集3 気候変動』における「アクティビティ4 私たちにできることを考えよう」にある「ランキングシート」(p.38)を配布し、そこに記載されている18の気候変動問題に取り組むアクションのヒントから、実際にやっていること、やってみたいことを選んでお話してもらった。

全体で選んだ項目をチャットにあげていただいたところ、既に、多くの項目に取り組んでおられる方や、取り組んでいきたいという関心の高さが伝わった。

一方で、「家族や友人に地球温暖化や気候変動の話を伝える」「調べる」「ものを大切に使う」「ゴミを減らす」「マイバックを持ち歩く」といった、生活において一人ですべてできる項目に集中しがちであり、社会的な働きかけについては、控えめであることも伺えた。

3. 分科会の問題意識

～個人の「善行」から社会の構造的課題としての取り組みへ

次に、主催する「SDGsと開発教育研究会」の活動や、昨年のd-lab分科会でSDGs理念について考えた内容を共有し、研究会編著の新刊である『SDGs学習のつくりかた～開発教育ハンドブックII』の趣旨紹介をした。

SDGsを学ぶとは、それぞれのゴールを知るのではなく、SDGsが記載されている「2030アジェンダ」の理念や価値を学び、従来の開発観、教育観を問うていくことが重要であることと、開発観・教育観の転換の先にある持続可能な社会への「変革」のために学習をどのように作るのかという具体的な課題を共有した。

そのうえで、気候危機は、SDG13に独立したゴールが打ち立てられており、それぞれのターゲットには、自然災害に対するレジリエンス、対策を国の政策・戦略・計画にすること、教育や人的能力、制度改善が掲げられ、実施手段として、途上国への投資とグリーン機構基金の本格始動、社会的弱者コミュニティの重点化とLDC(後発途上国)支援が明記されていることを確認した。

災害へのレジリエンスをはじめとして、それらの達成には社会基盤の強化からも、1～17全てのゴールから導き出されるものであり、むしろSDGs理念全体から取り組まなければ、気候危機に対して骨抜きになっていく。一方で、教育における環境問題への取り組みは、「こまめな節電」「グリーンカーテンづくり」といった個人の「善行」に焦点化される傾向にある。それらが無駄なわけではないが、気候危機に取り組む環境問題は、より社会の構造的課題として捉えられなければならない、やはり骨抜きではないだろうか、という点を問題提起した。よって、気候危機を教育で扱う際に、何を目的としていくのかについて、考えていきたい点を共有した。

4. 気候変動アクティビティから

共通する理解づくりのために、前述した『開発教育アクティビティ集3 気候変動』から「アクティビティ1 気候変動クイズ」と「アクティビティ2 気候変動の影響について考えよう」を行った。

そのうえで、世界のそれぞれの地域の影響をエピソードシートから読み込むアクティビティにより、気候変動による人々の暮らしの具体性を共有した。

5. ゲストスピーカーのお話

1) 気候変動への市民社会の取り組み (高橋さん)

国際環境 NGO FoE Japanの高橋さんは、2019年12月に開催されたCOP25(気候変動枠組み条約第25回締約国会議)における政権による市民社会弾圧に反対するアクションの様子や、グレッタ・トゥーンベリさんの活動をきっかけとしたFriday For Futureという世界規模での同時アクション、そこで展開されたコロナ後の経済社会復興にむけた若者の提言について報

告くださった。

さらに日本の問題として、気候正義の実現のために、石炭火力大国である日本の政策転換への指摘があり、現在行われている、横須賀石炭火力建設計画への住民や市民社会の取り組みについて説明された。

最後に、コレクティブ・アクションの重要性から、一人一人の生活をより脱炭素化することも重要だが、それには限りがあり、環境に配慮した選択を行うことが難しく、お金が余計に必要となるような社会システムを大きく変えることを優先すべき、という環境作家のエマ・マリスさんの言葉が引用された。

持続可能な社会をつくる活動には、現行のシステムに異議申し立てをしていけるような行動の集約がより重要になる力強いメッセージをいただいた。

2) 「心がけ」に終わらせない SDGs 教育～市民性を育むために(羽角さん)

高校で理科(物理)の教員をしてきている羽角さんからは、四つの問題提起(子どもの変化、日本の若者の政治的無気力、日本の環境教育の非政治性、学校や社会に潜む「隠れたカリキュラム」)があった。SDGs 教育を「心がけ」に終わらせず、市民性を育むためにはどうしたらよいか、という問題提起をしてくださった。

これらに対し、羽角さんは、30年くらい「自分にできることをやりましょう」という環境教育をやり続けてきたが、人々は政治に目を向けなくなった点、その一方で原発の推進等も進んでいった点、そして大企業の利益のために石炭火力を手放さず、与党の利権政治も横行している点を示した。しかし、住民・市民運動の力で計画を止めた事例も多く、市民運動は無力ではないと語った。

6. コメンテーターによる総括(田中さん)

お二人のお話をふまえ、コメンテーターの田中さんにまとめていただいた。以下、内容をまとめる。

SDGsで重要なのは、個別の目標にとらわれることなく、理念にたちかえって議論しようという点である。その中で三つの重要な観点がある。一つが「公正」であり、格差の観点。二つ目が「共生」であり、女性、子ども、障がい者、先住民といったマイノリティの観点。そして、「循環」としての生物多様性などの観点がある。その中で、開発教育は人間中心主義であったため、生物多様性を含む循環の問題をあまり考えてこなかったことが問題である。

そして、市民の力、市民社会システム自体を変える教育をどうつくっていくか、が課題であり、世代間の公正のために若者の声をいかに反映させていくかが大切である。

SDG 1～6に関わり、貧困飢餓、教育、衛生などといった主に途上国の課題をどのように解決していくかを気候変動から考えていくことが重要となる。そして、SDG 7～12以降に関わり、技術の革新や消費者教育の中で考えていく必要性や、ジェンダー平等、パートナーシップなども気候変動から考えていくことが大切である。

7. 気候危機を教育で取り組む際に何を目的にするか～グループディスカッション

最後に、「気候危機をテーマにした教育に取り組む際に、何を目的としたか?」「なんのためにやるのか?」というテーマのもと、参加者による学習グループディスカッションを行った。以下、全体共有されたディスカッション内容を掲載する。

・原体験が重要、頭で考えるよりも、子どものころの体験が重要。(「自己決定」の経験)

・気候変動や教育に関し、ショックをうけた状態で、セッションに入る。生徒学生時代は意見をすることが許されない状態で社会にでるとということ

・先生側があきらめずに、働きかけを行うことは重要。

・学校内で、仲間が見つからなくても、学校外での活動で居場所を見つける生徒もいる。

・学校で、受け止めるメッセージが異なる：主体的になれ、ルールを歩め、多様であれ、規格に当てはめろ・・・

・「隠れたカリキュラム」のインパクトの大きさ。市民を育てる、社会をかえるということがよしとされていなければ、教育の実態としてはつたわらない。クラス担任性をなくすと、文化が変わっていかなければ、気候変動教育もうまくいかない。

・総合の授業で、コンビニのごみ対策・リサイクル率。低公害(CO2を出さない車)をどのくらい行っているかなどを調査する、など取り組む。

・考え続けること、学び続けること、行動し続けることが大切だと思います。

・本気で取り組み本気で若者と対話します。地球規模で考え足元を継続していきます。素敵な教材を活用します。

最後にゲストより一言ずついただいた。

(高橋さんより)

グループの話し合いの中で、気候変動の話から逸れている、という会話があったが、それがあり方だと思った。今の社会はトピックごとに分断され過ぎていて、それらをつなげ直す必要があると感じている。環境、国際、貧困問題はすべてつながっている。(心がけ路線をやめる、市民性をはぐくむなどとなった時に、)成功例のモデルを求めがちだが、それだけでは対応しきれない世の中になっている。私たちがどうあるべきか、大切にしたい事を考え直し、一緒に作り上げ、そのための仕組み自分たちで考え、実現するクリエイティビティや能力が育まれたら良い。

(羽角さんより)

コメントやグループの話し合いを通じて、心がけ路線や、隠れたカリキュラムについて共感してもらえたことが嬉しい。グループの会話でカカオ豆の話が出た。チョコレートを作る体験から、3年生になった時に、さらなる探究のテーマにつながったという話だった。自身の環境の授業でも、何か月か後に生徒の進路に関わっていたことが分かったことがあった。それが教育だと思った。本気で話したこと、取り組んだ内容が思わぬところで効果がある。努力したことは、無駄ではないので、いろんなことに皆さんにも取り組んでいただきたい。日々の忙しさと取り組みの継続が難しいということにはよくある。イベントを開いたり、講演したりした後に参加者からフィードバックをもらうととても嬉しい。DEARとつながり、後からフィードバックしてもらえると嬉しい。そうすることで後々つながっていくこともできる。

8. おわりに

参加者の方々の関心が高く、また、気候危機に取り組むには「心がけ」ではなく、具体的な政策に対して声を上げていかなければならない点や、市民性を高めていく教育が必要であることに、共感された会であった。SDGsに関する教育も、同様な「心がけ」問題を抱えるなか、今後もこの点の議論を深められたらと考えている。

【報告者】近藤牧子

多文化共生って何だろう？ ～ネパール人留学生と一緒に考える～

ゲスト：グルンスバス、スレスタサンジブ 進行役：オジャラックスマン、大仲み子

日時：2月23日(火) 14:00～17:00 参加人数：33名



【ゲスト】

グルン スバス

ネパール出身で、母国で大学卒業し、中国企業勤務後、来日。現在は専門学校で国際ビジネスを学ぶ留学生。子どもの頃からボランティア活動に参加し、現在も沖縄ネパール友好協会のメンバーとして活動している。

スレスタ サンジブ

ネパール出身で母国の大学卒業、大学教員の経験も持つ。琉球大学大学院を卒業後、県内公立学校でALT(外国語指導助手)として、働きながら、沖縄ネパール友好協会のメンバーとして活動している。

【進行役】

オジャ ラックスマン(沖縄ネパール友好協会)

大仲 るみ子(多文化ネットワーク fu ふ! 沖縄)

1. 背景とねらい

ここ数年、沖縄県内のコンビニに行くと、外国人店員に出会うことが多い。日本語を理解し、スムーズに接客をこなす彼らの多くはネパール出身の留学生である。沖縄で暮らすネパール人は年々増加し、自転車で颯爽と走っている姿も良く見かける街の風景となっている。地域社会の中で彼らの存在は、どう認識されているのだろうか、ヒアリングしてみると「日本語が上手なアジアの若者」「最近多くなってきたインドの人たち」「アジアから働きにきている人たちかな」等、私たちの日常生活を支えるコンビニの店員として認識されているが、「よくわからない」というのが実情だと考える。将来への志高く、母国ネパールから、沖縄へやって来た彼らは、ここで何を見て、何を感じているのだろうか。

「多文化共生」社会の実現が叫ばれている今日、ネパール人留学生と「多文化共生」につながるアクティビティをすることで、お互いの気づきが共有され、関係性構築のきっかけになるのではないかと考えた。

そこで、2004年に開発教育協会で作成された教材「レヌカの学び」をアレンジした「スバスのまなび」を制作した。レヌカの学び制作者の土橋泰子さんは現在沖縄に在住し、活動に賛同、企画制作メンバーとなった。土橋さんが「レヌカの学び」をつくった意図として、「人と人之間にあるのは、国境ではなく人境。人と向き合うことで自分と向き合うことが始まり、人との出会いから新しい世界は広がる」とコメントしている。「レヌカの学び」解説書より抜粋)レヌカの学び制作から時を経た2020年のコロナ禍で、「スバスのまなび」を制作し、分科会で共有するとともに、新しい多文化共生の可能性について考

えていきたい。

2. プログラム概要

前半は、最初に沖縄の状況共有として、沖縄移民の歴史から今日の多文化共生の必要性について共有したあと、制作した「スバスのまなび」をグループに分かれて体験した。スバスさんが、日本(沖縄)へやってきて感じたこととネパールで感じていたことを Google Jamboard を使って共有し、参加者は気づきを意見交換した。

後半は、沖縄での多文化共生につながる取り組みとして、沖縄ネパール友好協会(ONFA)、多文化ネットワーク fu ふ! 沖縄、そして沖縄 NGO センターの活動を共有し、参加者それぞれの取り組みや今後取り組んでいきたいこと等について、意見交換を行った。

3. 実施内容

(1) 沖縄の外国人の状況を知る

100年以上前に沖縄から海外での仕事を求めて旅立った移民、海外に移住した沖縄出身者から戦後に支援物資が送られたこと、今日では沖縄の伝統文化が現地に根付いていること、現在は沖縄在住ベトナム人が母国ベトナムを支援する姿、在住ネパール人がネパール新年を地域公民館で祝う姿などを紹介した。

年々、外国人数は増加し、外国人増加率は全国で2位に上る沖縄。技能実習生の受入れが関係しており、コロナ禍での調査で聞かえてきた、ベトナム人の声「優しくしてください。いじめるのをやめてください。ベトナム人は、はみんな悪くない。別々で考えてください」というコメントを共有した。

(2) 「スバスのまなび」体験

① スバスさん自己紹介

② スバスのまなび～カードワーク～

・12枚のカードを「ネパールにいる時のスバスのこと」「沖縄にいるスバスのこと」に振り分ける

・グループの意見を出し合い、話し合っ決めてもらうこと

③ 全体で、振り分けるのに迷ったカードや印象に残ったことを共有。

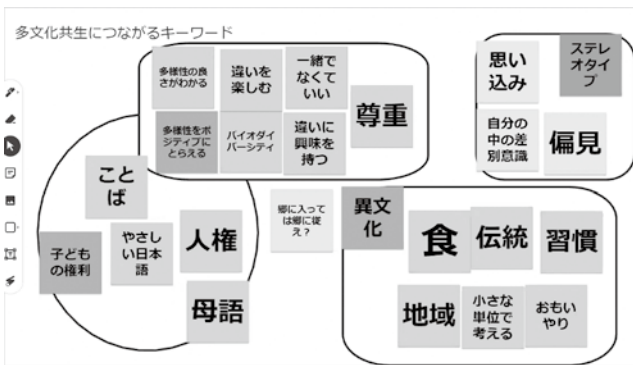
④ スバスさんからカード内容の説明。



- ・身近なところから取り組み、輪を広げていきたい。
- ・学校での取り組みやオジャさんの経験を共有
- ・日本人のハードルを下げたい。どちらかの文化ではなく、一緒に取り組むイベントをしたい。
- ・日本にいる人々の中でも、学校の中で多様性を理解できるようになったらいいのかなと思います。例えば、年齢と共に短い時間でまとめて話をできる人しか話してはいけないように感じるがありましたし、関わってきたユースからは、そういう声をきいてきました。まとまりがなくても話をして良いとか、どんな人でも受入れられるという認識を育んでいくことが大事のように思います。
- ・今度やさしい日本語ワークショップをオンラインでやろうと考えています。決まった際には DEAR の ML で告知します。

⑤多文化共生につながるキーワードの共有。

(個人→グループ→全体共有)



4. 参加者の感想

- ・ネパールの留学生の声をきけるというのは貴重な経験でした。助けを求めている人、助けたい人をつなぐ団体がたくさんあることも学びました。多文化共生のためのキーワードがいろいろ出てきましたが、人権という観点は、いつの時代もどんな場所でも忘れてはいけないことだと思います。
- ・日本に住む海外にルーツのある人たちについて、もっと向き合わなくてはという気持ちにさせられました。「レヌカの学び」をぜひ使ってみようと思います。
- ・地域とつながる多文化共生を自分でもやっていきたいと再認識できる時間でした。

(3) 地域の多文化共生を考える～事例共有と意見交換～

沖縄ネパール友好協会 (ONFA)、多文化ネットワーク fu ふ! 沖縄、そして沖縄 NGO センターの活動を共有し、参加者を交えて意見交換を行った。

① ONFA 沖縄ネパール友好協会の事例

- ・2015 年ネパール大地震が起きた時に母国ネパール支援がきっかけで設立
- ・沖縄とネパールの架け橋が目的
- ・ネパールの新年を祝うイベントを地域の公民館で毎年行っている。
- ・コロナ禍では市民から提供された食糧をネパール人学生達に配布した。

②多文化ネットワーク fu ふ! 沖縄

- ・コロナ禍での調査とネットワークミーティング開催

③沖縄 NGO センター

- ・オンラインテト
- ・多文化共生推進調査 (市民調査) を紹介した。

④グループワーク～地域で取り組んでいること、気になっていること、やってみたいこと～ (キーワード抜粋)

- ・外国人だから英語ではなく、その人が安心できる環境をつくるのが大事。
- ・「みんな同じ」雰囲気があるが、違いや対立を乗り越える教育をすることが大事
- ・地域ホームステイ、外国ルーツの子どもの進路支援や地域防災、やさしい日本語教材づくり。
- ・過疎地でのワークキャンプ事例が面白かった。化学反応が起こるようなプログラム。
- ・地域での活動を実施したい。

5. 発表者の感想と今後の抱負

今回、分科会を ONFA メンバーと一緒に担当し、全国からの参加者のみなさんにスバスの学びを共有し、多文化共生について考えることができたこと、感謝している。

分科会終了後すぐに、参加者の方から、「『〇〇のまなび』をつくらうと思立ち、仲間に連絡をとりました」というコメントをいただいたことは、今後続く可能性を感じるとともに、私たちが今後も地域で、スバスのまなびに続く「〇〇のまなび」ワークショップを展開し、開発教育や多文化共生の輪を広げていきたいとエンパワーされました。

人境を超えて、理解し合い、一緒に地域で生きていくことで、多文化共生の3つの壁と言われている心の壁、言葉の壁、そして制度の壁にせまっていけたらと思う。

【報告者】大伸るみ子

沖縄の自然と観光開発 ～ヤンバルの森を歩いてみよう！～

ゲスト：佐々木健志 進行役：島袋美由紀

日時：2月23日(火) 14:00～17:00 参加人数：35名

【ゲスト】

佐々木 健志 (ささき・たけし)

琉球大学博物館学芸員(助教)。主に沖縄の絶滅に瀕した昆虫類の保全生態学的研究について研究を行う傍ら、沖縄県や環境省の依頼を受け、自然保護行政にも協力している。また、県内学校での自然や文化に関する出前授業や市民を対象とした講演会などのほか、特別支援学校や院内学級などの教育支援にも取り組んでいる。

【進行役】

島袋 美由紀 (琉球大学博物館(風樹館))

1. 背景とねらい

琉球列島は、九州の南端から台湾にいたる約1200kmの間に連なる100以上の島から成り立っている。これらの島々は、その大きさ、地質、気候、島の成り立ちなどに違いがあり、島ごとに少しずつ異なる独自の自然環境が見られる。島に棲む生き物たちは、海によって隔離された環境に加え、地史や自然環境の違いによってそれぞれの島に固有の進化を遂げてきた。沖縄の生物の高い種の多様性は、島の特性と生物の進化によって生み出されてきたものである。

分科会ではまず、ゲストから沖縄を特徴づける「島」をキーワードに、島の種類や琉球列島の成り立ちとそこに棲む生物から、東洋のガラパゴスとも呼ばれる沖縄の自然環境の特徴とそこに棲む生き物たちの進化について紹介する。特に沖縄の生物の多様性を理解するためには、進化についての正確な理解が必要である。生物の進化においては、金子みすゞの詩にもある「みんなちがって、みんないい」ことが最も重要なキーワードになることを伝える。次に、なぜ沖縄と奄美が世界自然遺産に登録されようとしているのかについて、その背景とこれまでの経緯について解説する。そして、その候補地の一つである沖縄島北部の、通称「ヤンバル」と呼ばれる地域の自然と希少な生物を紹介するとともに、この地域が抱えている様々な環境問題について、自然保護と観光振興の両面から参加者とともに考える。

2. プログラム概要

前半はゲストが沖縄の生物多様性の特徴や観光開発の現状を解説し、後半はグループディスカッションと全体ディスカッションを行った。

3. 実施内容

(1) ゲストトーク「沖縄の自然と観光開発」

① 沖縄はなぜ東洋のガラパゴスと呼ばれるのか

沖縄県は、ガラパゴスと同様に亜熱帯に属し、大小160余りの島々

からなる島嶼地域である。沖縄にはイリオモテマネコやヤンバルクイナなどの限られた島にのみ分布する固有種が多く見られる。これらの生物もガラパゴスと同様に、沖縄の島々で独自に進化してきた生物であり、このことが沖縄を「東洋のガラパゴス」と呼ぶ最大の理由になっている。

ガラパゴスと沖縄の自然環境とはよく似ているが、大きく異なる点もある。それは、人と自然の関係である。ガラパゴス諸島に人が住み着いたのは1800年代になってからのことで、今でも人が暮らす島は4島に限られている。一方、沖縄の島々は有史以前から人が生活してきた場所で、沖縄の自然環境は人が全く手を触れていない原生的な自然ではなく、昔から人が自然とともに暮らしてきた場所である。それにもかかわらず、今日まで多くの貴重な生き物たちが生き残ってきたことは、沖縄で暮らしてきた人たちが自然を上手に利用しながら生活してきたことを物語っている。

② 「高い」生物の種多様性

沖縄県の面積は、日本全体の約0.6%しかない(後から4番目)。ところが、この狭い沖縄県には驚くほど多くの生物が生息している。沖縄県は日本の中でも、種多様性が非常に高い地域である。県内に生息している動物の割合を、おもな種類ごとに見てみると、大型の種が多く海を渡ることが困難な哺乳類では、沖縄には日本に生息している在来種の20%ほどしか生息していないが、爬虫類では63%、両生類では25%、さらに鳥類では渡り鳥なども含めて日本で確認されている種の約80%が沖縄で確認されている。また、日本にいる種類がほぼ分かっているホタル類、クワガタムシ類、セミ類、トンボ類などの昆虫類では、それぞれの種類の1/4から半数が県内に生息しており、さらに、その多くが沖縄だけに見られる固有種である。

③ 島の生い立ちと島の種類

琉球列島周辺の様子を海底地形図で見ると、日本本土からアジア大陸の東の縁に沿って細長く連なる島々と、深い琉球海溝を挟んで太平洋に浮かぶ大東諸島との二つの島の塊があることに気づく。これらの島の塊は、その生い立ちに違いがあり、琉球列島は「大陸島」、大東諸島は「海洋島」と呼ばれる島からできている。このように2種類の島があることも、沖縄に多様な生物が生息する大きな理由の一つである。

一方、海洋島とは、海底火山の噴火やサンゴ礁の形成などによってできた島で、過去に一度も大陸と繋がったことがない。先に紹介したガラパゴス諸島や日本の小笠原諸島は、海洋島である。海洋島に生物が移り棲むには、空を飛んで来るか、あるいは海を泳いだり

流木などに紛れたりして渡って来るしかない。そのため、海洋島ではシカなどの大型のほ乳類、空を飛ぶのが苦手なセミやホタルなどの昆虫類、皮膚が弱く海水が苦手なカエルなどの両生類が見られず、生物の種類も少ないという特徴がある。

④ 沖縄の自然環境の保全

戦前までは大規模な開発もほとんどなく、良好な自然環境が保たれてきた沖縄も、第二次世界大戦の沖縄戦による荒廃と復帰後に急速に進んだ都市化や開発によって様々な環境問題が生じて来た。特に、本土復帰後に急激な開発の波が押し寄せた沖縄島では、海岸部の埋め立てや森林開発などの大規模な自然破壊が現在も進行している。さらに、近年世界中で問題となっている外来生物による生態系への影響や、希少生物の乱獲などによる個体数の減少なども深刻な問題となっている。

沖縄県の絶滅に瀕した生物をリストアップした「沖縄県版レッドデータブック」では、県内に生息する全ての哺乳類と両生爬虫類の約50%が絶滅の恐れがある種として掲載されている。

⑤ 世界自然遺産登録と観光開発

現在、沖縄県と鹿児島県では、奄美大島、徳之島、沖縄島(やんばる)、西表島を一括りとして「世界自然遺産」への登録作業が進められている。環境省と沖縄県は、昨年度に世界自然遺産の登録を審査するIUCN(国際自然保護連合)に申請書を提出したが、特に沖縄の対象地域について「推薦地の分断による、生態系(IX)維持の持続可能性」、「米軍返還地を含めることの必要性」、「外来生物の駆除・管理体制の構築」、「観光開発や観光客管理のための管理計画の策定」、「希少生物のモニタリングシステムの構築」などに懸念があるという指摘があり、登録の延期が決定された。

その中で最も重要かつ困難な事項の一つが「観光開発と観光客管理」への対策である。先行する世界自然遺産地域の事例にもあるように、自然遺産への登録後は観光客が急激に増加する可能性が高く、それに伴う自然環境への負荷、水、トイレ、宿泊施設、交通機関などのインフラ不足、さらには人、ゴミ、車の増加などによる地域住民への影響などの様々な問題が生じる可能性がある。特に島嶼環境である沖縄では、このような問題が他地域に比べて顕著になりやすく、早期の対策が必要である。

沖縄県の観光産業を持続的に発展させていく上で不可欠な資源の一つが、沖縄の豊かな自然環境である。観光開発と自然環境保全とのバランスを取りながら、それぞれの地域に適した自然資源の観光利用のあり方を考えることが重要な課題となっている。

人による自然資源の利用は不可避だが、自然資源の持続的な利用と生物多様性の維持を図るためには、沖縄の昔ながらの生活にヒントがある。小さな島の自然資源は限られるが、その反面、多様な資源を有している(限定性と多様性)。このような自然資源の使い方としては、集約的な利用ではなく、分散利用が重要で、特定の資源に集中することなく、多様な資源を限定的に利用し、資源の自己回復を見込んだ非集約的な利用が不可欠である。

(2) グループ・全体ディスカッション

「沖縄の自然のどんなところに魅力を感じますか?」というテーマで6グループ(A~F)に分かれてディスカッションし、その後、全体共

有を行った。ディスカッションのテーマであった自然の魅力より、自然保護と経済振興のバランスや、エコツーリズムの課題についての議論が多かった。

[Aグループ]

海洋資源の豊かさ、鳥、マングローブなどの自然が魅力である。エコツーリズムの課題が多く、日本だと観光客が求めるものが高い。不便さなども含めた多様なツアーの展開が必要だと思う。

[Bグループ]

住んでいる人よりは、外の人の方が魅力を感じやすい。「リゾート地」としての魅力のほうが感じている人が多い。オーバーツーリズムの問題を知った。C魅力に感じているのが人工的に作られたものを想定している。「観光地化」について現地の方が望んでいる背景があるので、悩ましい。いろいろな要素を考えて行かなければならない。

[Cグループ]

経済と自然を守ることの両立を考えるのは難しい。参加者も自然を守ることを勉強してからエコツーリズムに参加する方がよい。北部の米軍基地について返還後どうなるのか、米軍が作った海中道路よりも、ひどい海中道路を日本は作っている。

[Dグループ]

沖縄の自然の魅力、生物多様性ということを改めて認識させられた。素晴らしいと思ったものは「作られた」ものに過ぎないのかな、と感じた。エコツーリズムは気になっている。参加している人も事前学習が必要。

生徒にエコツーリズムについて考えさせる必要性がある。経済と保護の両立を欲張らないほうがよいと思う。

[Eグループ]

固有の生物の情報を沖縄の方々にはあまり知らないのではという話があった。エコツーリズムの理念は地元の人がガイドをして、地域のなかで、循環することが理想。ツーリズムに参加してかえって環境破壊する可能性がある。沖縄は自然だけを切り取って楽しみにしていく方もいるが、食べたり飲んだり人にあたり、考える要素があったりするのが「魅力」「深み」としてうつる。

[Fグループ]

あまり知らなかったことを知ることができ新しい魅力に気付いた。人の歴史、平和教育に目が行きがちだったが、自然にも注目してみようという話も出た。エコツーリズムのガイドの養成も含めて、エコツーリズムによって自然を破壊している問題も存在している。経済と自然保護の対立の話をするときに発展についての考え方を改めるべきだと思った。

4. おわりに

終了後のアンケートでは、多くの参加者から、ゲストの話が専門的な内容にも関わらずとても分かりやすかったとの感想をいただいた。この分科会での学びや気づきやが、沖縄だけでなく、参加者の地元や在住地域の「自然と開発の課題」に目を向けるきっかけとなり、それぞれの立場や社会において役立ててもらえれば幸いである。

【報告者】 鳥袋美由紀

地域ですすめる SDGs ～沖縄、北海道、関西から～

発表者：岩崎裕保、小泉雅弘、玉城直美 進行役：近藤牧子、中村絵乃
日時：2月23日(火) 14:00～17:00 参加人数：36名

【ゲスト】

岩崎 裕保 (いわさき・ひろやす)

関西 NGO 協議会。1980 年代に開発教育を知って、人生の半分以上の付き合い。89 年に京都で始まった「開発教育研究会」に参加。ニュージーランド学会やとよなか国際交流協会などの理事も務め、2008 年から 6 年間は DEAR 代表理事。数年前に奈良の町中に移住したものの、近頃は宮本常一や鶴見俊介などの本を改めて読み直している。

小泉 雅弘 (こいずみ・まさひろ)

1962 年、神奈川県藤沢市生まれ。現在、北海道札幌市在住。NPO 法人さっぽろ自由学校「遊」事務局長、北海道 NGO ネットワーク協議会理事、酪農学園大学非常勤講師。共著書に『非戦・対話・NGO』（2017、新評論）、『SDGs とまちづくり』（2019、学文社）など。

玉城 直美 (たましろ・なおみ)

沖縄 NGO センター／沖縄キリスト教学院大学。沖縄 NGO センターにアルバイトスタッフで関わり、気が付くと理事長になっていました。沖縄の開発問題をどうしたら教室や生活の中で考えられるのか日々活動中。SDG s、主権者教育、ジェンダー、等々興味関心は尽きない。

【進行役】

近藤 牧子 (DEAR 副代表理事)

中村 絵乃 (DEAR 事務局長)

1. 背景とねらい

現在、全国の自治体や企業、学校などで SDG s (持続可能な開発目標) に関する取り組みが行われるようになってきている。しかし、SDGs の理解や取り組みが、「2030 アジェンダ」にあるように、「誰一人取り残さない」「変革」につながっているのか、については疑問がある。

2019 年 9 月に開催された「SDGs サミット」では、国連事務総長報告において、「SDGs 達成の取り組みがスピードとスケールにおいて十分ではない」ということが言われている。さらに、「サミット政治宣言」では、地域の取り組み強化が求められている。

DEAR では、地域に向き合う開発教育を実践してきた。地域の開発を考えることは、今の持続不可能な社会の構造を考えること、経済だけでなく人権を優先する社会を考えることを含んでいる。さらに、市民主体の地域づくりや学習を重視してきた。

以上の問題意識から、今回 3 人のゲストを招き、地域における SDG s の推進について考えていきたい。本分科会の目的は以下のとおりである。

<目的>

- ・地域で市民主体ですすめられている SDGs の政策づくりや実践を広く共有する。
- ・地域で SDG s の目標や理念を共有していく際の工夫、伝え方・広げ方について考える。

2. プログラム概要

分科会には、全国から、教育関係者、NGO / NPO、自治体関係者などが参加した。

まず、グループで自己紹介をし、自分の地域の自慢を共有した。その後、3 人のゲストから、各地域で SDG s をどのようにすすめているのか、そして、SDGs の目標や理念を共有していく際の工夫や伝え方を話してもらった。

さらに、グループで、自分の地域では、どのように理念を広げていくかを話してもらった。

3. 実施内容

(1) SDGs と地域という？

参加者に「SDGs と地域」と聞いて、思い浮かぶことを出してもらった。町内会の人とのゴミ拾い／遠そうに近い。そして遠くない／「グローバル」という言葉／人権よりも環境的な視点で取り組む企業が増えている？／行政の焦りが感じられる／地域の焦点が当たる一方で、まだ、グローバルには繋がっていないかも／学校で教えられるようになったので、子供に押されて役所の人も関心をもつようになった、などが出された。

(2) ゲストの話

1) 沖縄における SDGs の推進 (玉城さん)

①背景

SDGs に関しては、沖縄は後発組だと思っている。MDGs から SDGs になって、企業などの活動が活発になってきたのと、北海道や関西の事例を聞いて刺激も受けていた。

②県の取り組みへの参加

2018 年に玉城デニー知事が、沖縄県民の民意のなか当選し、「誰一人取り残さないやさしい沖縄社会」を打ち出した。その後、県民投票で「辺野古移設反対」が明確になり、万国津梁会議*1 が設置され、SDGs 部会が誕生した。民間の意見を取り入れるために、その部会の委員として、声がかかり、「沖縄県 SDG s 推進指針」*2 づくりに関わった。

性の多様性や、沖縄の基地から派生する人権問題、島くとうば

の問題、政治的な問題を積極的に盛り込んだ。600回以上のSNSやメールなどでやり取りを重ねて、今回の方針はできた。

③今後の取り組み

理念や方針は良いものができたと思う。その後、具体的に、米軍基地問題や子どもの貧困の問題の解決、どのように課題解決するのか、を考えていくことが課題である。

沖縄県では、「おきなわSDGsパートナー」を集っており、2021年2月時点で100団体になり、何か動き出したいと思っている企業や組織を募っている。

沖縄社会をどうにかしたい、と答える企業も多い。地元のメディアの動きも活発化している。パートナーシップを組みながらどう連携していくかが話されている、2021年以降特に教育現場に関する普及啓発活動、指定校を作る予定。

2) 北海道でのSDGsの推進(小泉さん)

沖縄が成功例だとすれば、北海道はうまくいかなかった事例として聞いてほしい。

①さっぽろ自由学校「遊」(以下、「遊」)

社会の課題を考える講座を実施している。「2030アジェンダ」が採択されたことをきっかけに、ローカルアジェンダを作ろうという動きになった。ゴールとの紐づけではなく、自分たちの未来を自ら考えていく必要があると思い、個性や具体性とSDGsの普遍性を往復運動させていくイメージで始めた。

②北海道の地域目標を作ろうWS

9のテーマに沿ったワークショップを月一回開催。SDGsを下敷きにはしているが、北海道で欠かせない先住民族のテーマも入れて小冊子*3にまとめた。実施が早かったこともあり、関西や沖縄など他地域から参考にしたいという声があった。

立場によって、SDGsの見え方も変わることから、アイヌの視点からSDGsを考える冊子を作成した*4。アイヌをSDGsと絡めることで、アイヌに興味を持っていない人にも届けることができた。

③国連のオープンプロセス

国連にはメジャーグループという、当事者がSDに関する政策の策定に参画する仕組みがある。2018年に北海道SDGs推進ビジョンの懇談会のメンバーになったので、道の政策に声を届けるために、メジャーグループを真似て懇談会有志で意見をまとめ、提案をしたが、道のSDGs指針には一切反映されなかった。

一方で、メジャーグループの会議は継続していくことになった。EPO北海道*5と「遊」が共同で、2020年2月に広く呼びかけた。テーマではなく主体別にすることにはこだわった。先住民族のグループを作りたいが、うまく入れられなかった。国連の未来に関する対話の3つの問い*6を共通の問いにした。

④グループでの話し合い

各グループから、対話を通じて「自分たちはマイノリティ」「大きな力と闘うためには対話とネットワークが必要」という言葉が出てきた。ユースは一番丁寧にすすめ、「私の本当にこうしたいが、社会によって捨てられることのない未来」という言葉が出てきた。

全体ミーティングで、共感する部分が多かった。マイノリティのまま社会に発信していくということが重要だと思っている。

⑤SDGsの危うさ

SDGs未来都市になり、行政が旗振りをし、企業がロゴを使う一

方で、従来型の開発行為は依然として続いている。SDGsが後ろ盾となって、再生可能エネルギーの推進が全国の過疎の町などで進んでいるが、環境問題や景観の問題があり、住民から悲鳴が上がっている。政府のアイヌ政策は、文化観光事業に特化している。核のゴミ、新幹線の延長、オリパラなど、行政が進めていることは、SDGsを形骸化してしまう実態がある。これをどうしたらいいのか。バックキャストिंगだけでは十分ではない。歴史、文化、生活、それらが壊されてきたのが北海道の開発。それらを見つめ直し、経済界の空虚なSDGsに魂を吹き込むためにも、市民(people = 一律ではない人々)が声を上げていかないと私たちの未来を創ることはできない。

3) 関西のSDGs推進の動き(岩崎さん)

①関西NGO協議会(以下、KNC)

ネットワークNGOとしては、日本で一番早く1987年6月に発足している。会員数は関西は35団体、関西以外は3団体。

②KANSAI SDGs市民アジェンダ

2017年12月にJICA関西の主導という形で「関西SDGsプラットフォーム」*7が設立された。関西の民間企業や市民団体、教育機関、自治体などが連携して、持続的な社会の構築に向けた経済活動の加速を目的としている。このプラットフォームがSDGsの主流となるのは、危ういのでは、という声があがった。KNCが経済成長だけでなく、「社会的包摂」と「環境保護」の調和が大切だと提案し「KANSAI SDGs市民アジェンダ」*8作成を呼び掛けた。

③市民アジェンダキックオフ

北海道の事例を見て、2018年9月から分科会を継続的に開催し、様々なテーマで話し合いを進めてきた。2020年、子どもや外国人の問題をテーマに、オンラインで分科会を開催した。

CSネットワークフォーラム(2019年3月)、C20サミット(2019年4月)、G20大阪市民サミット(2019年6月)など、他団体との共同も進めてきた。C20サミットでは、中国やモンゴルの参加者から、自身の地域でもローカルアジェンダの策定に取り掛かりたい、という声があがった。

④活動の発展

KNCは2014年から国際協力イベントである「ワン・ワールド・フェスティバル for Youth」を開催。2019年にアジェンダ策定プロジェクトを実施し、2020年はユースの提言セッションを実施した。高校生が中心となってまとめている。

2020年4月、COVID-19情報共有会を実施したことをきっかけに「私と地域と世界のファンド：みんなおなじ空の下」基金*9を立ち上げてコロナで大変な状況にいる人たちへの募金を開始した。800万円が集まり、支援につながられた。次第に、SDGsの根っこにあるものは「人権」という共通のキーワードが見えてきた。

⑤課題

KNCはSDGs採択の前からSDGsに掲げられた活動をしてきた。会員の活動や歴史を評価しそれをつなげていく。COVID19であぶりだされた課題に対してSDGsののっとなって解決を目指している。万博の主たる目的は、「公衆の教育」だと博覧条約に記されている。大阪万博(2025年予定)の会場は大阪湾の埋め立て地で環境や安全性などの問題がある。SDGsののっとなった運営がなされているか注視する必要がある。「人類の進歩と調和」(70年万博のテー

マ) は、私たちの暮らしとどうつながっているか、を考える必要がある。

グローバルな市場経済の進行によって拡大してきた事柄を SDGs で扱わざるを得なくなった。SDGs は目標なので、問題そのものに切り込む立場はとっていない。参加のプロセスを位置付けて当事者による働きかけを示している部分は大切。沖縄の、島くとうばを目標 18 にということで、カンボジアで地雷廃絶を目標 18 にしていることを思い出した。自分の暮らす地域における目標を考えることが大切。

(3) ゲストの話の整理と質問

①万国津梁会議は、知事の諮問機関として、メンバーが集められたのか？

→沖縄の問題を県庁だけで解決するのは難しい。知事の考えの背景のもととなる専門機関としての役割があり、基地対策、子どもと貧困、稼ぐ力、SDGs などの部会がある。(玉城さん)

②多様なメンバーと活動するにあたり、どう周りに声をかけていったのか？

→メジャーグループの声かけについては、EPO 北海道と一緒に活動してきたため、EPO と「遊」の人脈がうまく重なった。「遊」は 30 年間様々な講座をやっており、札幌のつながりはかなりある。声掛けはしやすかった。(小泉さん)

③ KNC のネットワークはどう機能したのか？

→ KNC がいろいろな場所で様々な活動をしてきたことが力になっている。人道的・市民・民主的といった理念に基づいた 30 年間の蓄積ベースになっている。(岩崎さん)

(4) グループワーク

ゲストの話の感想と、参加者自身が、SDGs の目標または理念をどのように共有していくのか、(短期的な啓発活動としてではなく、継続的な社会づくりとして位置づけて) 考えて共有した。

最後にゲストより一言ずついただいた。

玉城さん：あまり前のめりになりすぎず、半歩くらい先を行きたい。企業の人や行政の人と括らないようにしている。県民とどんな社会にしていきたいか議論をできるいい時期に来たと考えている。深刻に考えすぎず、楽しさも大切。全国的にこうやって考える機会をまたほしい。

小泉さん：SDGs という言葉で、普段講座には来ない人たちも来る一方で、中身をちゃんと捉えていく必要がある。持続可能な社会を創っていくことは必然であるが、それに対してどういうアプローチが必要なのか。簡単ではないが、みんなで考えていくことがいつも必要。

岩崎さん：SDGs をてこにして公正な社会づくりをおこなっていく。処方箋は地域にある。ピラミッド型ではない、クモの巣のようなヒューマンネットワーク。刺激し合える問柄は、同質ではなく、信頼感があること。地域に共通の関心を発掘することからも、SDGs はありだと思った。KNC で手探りで始めた感じ。地域の歴史などにきちんと向き合うことから、地域の個性や人格を大事にしていければと思っている。

4. 所感

参加者からは、地域の捉え方が、人によって異なるので、定義を共有しておくべきであった。一方で、ゲストの話に刺激を受けて、参加者は自分の地域に引き付けて考えてくれた。「他地域の事例を詳しく聞いて、自分の地域の取り組みを考えた」という感想が多かった。

地域だからこそ見える SDGs の課題や可能性が浮き彫りになった。SDGs の名のもとに持続不可能な開発がすすむことへの危機感を共有しながらも、地域の課題に積極的に取り組む企業や行政との連携も議論された。

三者三様の地域の取り組みを通して、SDGs の本質は何か、教育の課題、意思決定のあり方や当事者とはだれか、などの共通のテーマについても意見交換ができた。今後も、全国の事例を共有し、地域における SDGs の推進を考えていきたい。

●脚注

*1 沖縄県の政策策定のため、知事が示すテーマに基づき、有識者(委員の任期は 2 年以内)で構成する諮問委機関。

*2 https://www.pref.okinawa.jp/site/kikaku/chosei/chosei/sdgs/documents/suisinhousin_r3_2_kaitei.pdf

*3 『SDGs 北海道の地域目標をつくろう』(2017) http://www.sapporoyu.org/modules/sy_book/index.php

*4 『SDGs ×先住民族』(2018)

http://www.sapporoyu.org/modules/sy_book/index.php

*5 北海道「環境パートナーシップオフィス」https://epohok.jp/about_epo

*6 https://www.unic.or.jp/activities/international_observances/un75/join-conversation/

*7 <https://kansai-sdgs-platform.jp/>

*8 <http://kansaingo.net/kansai-sdgs/>

*9 <https://congrant.com/jp/mlg-fund/index.html>

【報告者】中村絵乃

島くとうばワークショップ ～うちなあ旧暦年中行事(ウユミ・シチビ)の魅力～

発表者：宮里ジュン、赤嶺龍風、根間広人、比嘉七星（特定非営利活動法人沖縄ハンズオン NPO）

日時：2月20日（土）13:00～15:00 参加人数：33名

【プログラム概要】

◆テーマ：『ウユミ・シチビ（旧暦年中行事）から学ぶうちなあ真髓と心髄』

◆展開コンセプト：「親ぬ懐や命どう宝」 ※意味：うやぬ、ふちゆるや、ぬちどうたから

今回の d-lab2020 のテーマである「命どう宝」を起点に、琉球王朝時代から伝承され、現在その伝承基盤世代の意識が薄くなりつつある沖縄旧暦年中行事（ウユミ・シチビ）を紹介しながら、うちなあ親先祖（うやふあーふじ）から伝承されてきた、いかなる状況や時代でも生き抜いてきた知恵と命どう宝の心得、またその歴史を映像や写真を交えながら解説する。また、うちなあ文化理解と多様性の観点から、新しい生活様式に適合できる心の処方箋を、シェアビリティーの基盤づくりを通して参加者と共有する。

◆目的 ～新しい支援と志縁の拠点づくり～

地球のこと、地域のことを本気で考えている人々を、点と線で繋ぎ、面づくりをすることで、地域から孤立した方々や世代とのつながりを途切れさせない活動を起こすきっかけづくりに邁進する。

【実施内容】

1) イントロ

- ①あいさつ・自己紹介・団体紹介
- ②団体紹介・文化の変容動画：写真
 - ・島くとうばがなぜ、大切なのか、背景の説明
 - ・観光地シンボルとしての首里城とうちなあアイデンティティの御城（うぐしく）とは。

2) アイスブレイク 沖縄のじゃんけん プーサーシー

3) プレエクササイズ うちなあ式しまくとうばで自己紹介に挑戦

4) メインエクササイズ

- ①願えーる幸うえーから学ぶ暮らしの中の御願
→うちなあおばあの御願と火ぬ神（ひぬかん）について。
→うちなあ風水人とは？めーしらしー（異変予兆）とウシラシグトゥ（御先祖様からのお知らせ事）
- ②うちなあ神々や御先祖様との対話～祈り言葉（グイス）を学ぶ～
- ③歌で覚えて身につく、しまくとうば御願の心得

5) フィードバック 身近にある、ぬちどう宝とは？

- ①ブレイクアウトルーム（15分）1グループ3～4人で「身近にあるぬちどう宝」を考える
- ②全体共有（10分）
- ③説明（20分）ぬちどう宝の真髓とは？命こそ大切、支えてい

る植物、自然、も全て大切。

自分たちの人間を最優先して考えてしまっている。

④質疑応答（10分）

【参加者の感想】

・首里城の歴史の真髓を知る事ができて、沖縄に対する見え方がガラッと変化した。メディアや SNS の情報に捉われず、正しく学び考えていくことが大切だと強く感じた。

・今回初めて沖縄の言葉・文化や精神世界に触れ、言葉の違いに驚いたが、多様性の心を学ぶことができ、現代の私たちの生活と通ずるものを感じた。

・沖縄の言葉だけでなく、おまじないや昔遊びなど多方面から楽しく学ぶことができた。発音が難しかったが、今後も活用できるようにまずは挨拶から練習したい。

・『命どう宝』という言葉を通して、人もモノも自然も、何一つ欠けては成り立つことのできない、かけがえのないものであるということに気付かされた。



【まとめ：実践者の学び・気づいたこと】

d-lab2020（第38回開発教育全国研究集会）のワークショップ出演の機会を頂き、主催の DEAR（開発教育協会）様、同会事務局の中村絵乃様、沖縄 NGO センター理事長の玉城直美様に心より感謝申し上げます。いっぺーにふえーでーびる！コロナ禍だからこそ、点と点から線、そして面へと志縁の輪を拡げるリンクワーカーとして、これからも SDGs とうちなあウユミ・シチビで、誰一人取り残さない持続可能な未来のあり方について、異世代多世代で取り組んでいきます。今回ワークショップに参加して頂いた全国の皆様の縁、「御引（うひ）ち合（あ）ーし」に感謝致します。にふえーでーびる。

【報告者】 宮里ジュン、赤嶺龍風、根間広人、比嘉七星

「ひめゆり」から戦争体験を学び、 伝えるために“私たち”ができること

発表者：古賀徳子（ひめゆり平和祈念資料館）、佐々木綾菜（NPO 法人沖縄 NGO センター）

日時：2月21日(日)10:00～12:00 参加人数：32名

【プログラム概要】

沖縄戦とひめゆり学徒隊について参加型で学ぶことをテーマに、ひめゆり学徒の証言を元に制作されたイラストを使ってフォトランゲージを行った。ひめゆり学徒隊の具体的な体験を通して、何が彼女たちを戦場に向かわせ、犠牲を大きくしたのかを知り、そこから“私たち”が何を学び、伝えていくかを考えることをめざした。



【実施内容】

1) ひめゆり学徒隊やひめゆり平和祈念資料館の概要

ひめゆり平和祈念資料館の紹介動画（3分）の視聴や、写真やイラストを使って、ひめゆり学徒隊の沖縄戦の概要の解説を行った。学校生活の様子や沖縄陸軍病院での仕事、南部撤退から解散命令までの状況を説明した。

2) フォトランゲージ「絵で見るひめゆりの証言」、証言映像の視聴

学徒隊の解散命令後に、生徒たちが体験したできごとを描いた3枚のイラストを使ってフォトランゲージを行った。グループに分かれてから自己紹介をおこない、イラストを観察して、どんなできごとがあったのかを話し合った。

全体場で3グループに報告してもらった後、絵のもとになった証言と状況を解説した。

絵のもとになった宮城喜久子さんの証言を、映像で視聴。その感想を紙に書いた後、グループで話し合った。

3) 「ひめゆり」から戦争体験を学び、伝えるために“私たち”ができることを考える

「ひめゆり」から何をどうやって伝えられるか、グループで話し合った後、全体で手をあげたり、チャットを使ったりして意見や質問を出して話し合った。

【参加者の感想】

・絵を見てフォトランゲージという手法は、写真以上に語り手（描き手）の心情に入り込む。そこで一生懸命に考えた後に、証言を伺ったので、心をより動かされた。

・今の時代でも物事に対し、言われたことをそのまま受け取るのではなく、自分で考えられる人、人間にとって大切なものは何か考え、それを侵害させないことを教育の中で伝えていく必要があると感じた。

【まとめ：実践者の学び・気づいたこと】

「ひめゆり」に関心がある、あるいは資料館を訪れたことがある参加者が多いと予想したため、アクティビティはフォトランゲージとグループの話し合いだけにして、説明や証言映像の視聴に時間をとった。フォトランゲージをしてから証言映像を視聴したのは効果的だった。今は新型コロナで沖縄に来てもらうことは難しいが、当時の状況をイメージしながら証言を聞いてもらえた。グループの話し合いで「教育、情報統制の怖さ」「本当にその情報が正しいのかと常に考えること、自分の頭で考えることが大事」等の感想が出されるなど、証言のメッセージがよく受け止められていた。

イラストについては、無残な場面が描かれたものもあり、「戦争画をじっくり見るのは気持ち的に厳しかった。グループワークで共有する仲間がいて助かった」との声が寄せられた。負担を感じる参加者がいることを理解した上で、そうした気持ちを言葉にできる場をもうける必要があることを学んだ。

全体で質問や意見を話し合う時間を確保したつもりだったが、「ワークショップをやっても『過去のこと』となってしまう、なかなか自分ごとにならない」「子どもが受動的でなく、自分から知りたいたいと思えるきっかけがあれば」などの悩みや質問を丁寧に拾い上げることはできず、時間切れとなった。グループでの話し合いを2回にしてもよかったかもしれない。

【報告者】 古賀徳子



ぬちぐすいまちまーいオンラインツアー

発表者：新里聡（株式会社国際旅行社）、眞榮里良人（アガリメーション）

日時：2月22日（月）11:00～12:30、13:30～16:00 参加人数：午前約30名、午後約20名

【プログラム概要】

沖縄の地域（うるま市、勝連、平敷屋地域）の歴史や、生活文化を知り、ぬちぐすい（命の薬）ツアーを通して心の癒し体感してもらう。地元平敷屋出身、実家を改装した喫茶&ゲストハウスアガリメーションの店主でもある眞榮里良人氏をガイドとして、地域にある歴史的な史跡の紹介や生活スタイルが漂う古民家風cafeから沖縄独特な生活文化、歴史をお届けしながら地域で生産している小麦を材料とした「本気の麦茶」焙煎体験を通して、ぬちぐすい（命の薬）を参加者へ感じていただくプログラム内容。



進行役の新里氏

【実施内容】

1) アイスブレイク

進行（新里）よりご挨拶、ツアーの注意点、ぬちぐすい（命の薬）という意味で、美しい自然にふれたり、おいしいものを食べたりすると心と体が元気になるという沖縄の言葉の意味を説明後、眞榮里氏の自己紹介の流れでスタート。



ガイド役の眞榮里氏

2) 平敷屋タキノー、旧製糖工場跡の紹介

ここからは眞榮里氏がガイドとして平敷屋タキノーからスタート。風光明媚な小高い丘からはホワイトビーチが見渡すことができ、綺麗な海の眺めと基地が隣り合わせという地域特有の景色を見ていただいた。また、300年前の地元で活躍された琉球王府の役人：平敷屋朝敏（へしきやちょうびん）の業績（農業用溜め池作りに尽力、琉球王府管轄の狼煙台を地域の人々の為に解放し利用など）の歴史を説明。その後は徒歩移動しながら周辺の案内を交えつつ、旧製糖工場跡を歩きながらガイドをしてもらう。煙突跡には戦争時の弾痕が今なお残っており、戦争時の砲弾の激しい様子が伺えた。



本気の麦茶の作り方について説明

3) うるま市、勝連、平敷屋地域の紹介

進行（新里）よりうるま市の紹介（本島での位置、人口、2市2町が合併にて誕生、特産品）、勝連半島の紹介（勝連城址、海中道路）、平敷屋地域の紹介（ホワイトビーチ、平敷屋タキノー、平敷屋エイサー：動画）をおこなう。

オンラインから体験してもらった。

4) アガリメーションの紹介

再び眞榮里氏がガイドとしてスタート。アガリメーションの紹介（眞榮里氏の実家を改装、正月や行事には家族が集まる場所、沖縄ならではの仏壇の説明、アガリメーション（屋号）の意味）を通して、沖縄地域の日常にある素朴な生活様式、文化を垣間見ることがオ

5) 本気の麦茶の紹介

アガリメーションの定番メニュー「本気の麦茶」焙煎体験と試飲をおこなった。伊計島産の小麦を使用した背景の紹介やその栽培復活を果たした生産者の想いを語っていただきながら、眞榮里氏が小麦をフライパンで焙煎し、コーヒーミルで挽き、ポットへ移して

適度な温度のお湯を注いで完成。茶器（やちむん）の紹介などを挟み、眞榮里氏、新里（事前準備）とでホットの香りと甘み、アイスでの爽やかな飲み心地を参加者へ伝える。アイスに関してはストローを小麦の茎の部分を利用する取組もおこなっていると紹介した。

6) ぬちぐすいとは？

最後の10分に進行（新里）と眞榮里氏で対談形式でおこなった。宿&喫茶以外での取組は？には、平敷屋エイサー保存会での活動などのお話。眞榮里さんが地元から届けていきたいこと、発信していきたいことは？には、旧歴などでの横のつながりを大切にしたいというお話。そこで感じる、「ぬちぐすい」とは？には、「ゆいまーる、ゆいの精神が大切なのかな、と思う。健康の大敵はストレス。横のつながりを大事にしていく文化はある意味、いちばんのぬちぐすいなのかな」というお話があり、アガリメージュで体感してほしい「ぬちぐすい」とは？には、「よく“おばあちゃんの家に戻ってきたみたい”と言われるんですけども、とても嬉しくて、特別なことはないけれども、沖縄の古い暮らしを体験してもらえたらなと思います」という内容で進んだ。眞榮里氏の地元愛に溢れた言葉を参加者へ届けることができた。

7) 交流会

沖縄NGOセンターの新膳氏が司会進行でスタート。参加者7名と新里、眞榮里氏も振り返りとして参加。アイスブレイク（参加者自己紹介、感想を共有など）から、参加者から質疑を受け、眞榮里氏や新里が回答する形式でおこなった。参加者からの質疑と応答の内容として、Q「エイサーはどこから伝来している？いわきにも念仏踊りがあるが、そういう繋がりがあるのか？海外からのとのつながりは？」A「エイサーは地域によって発祥・伝来は異なる。江戸時代の僧侶袋中小人が念仏踊りを広げたことがエイサーの起源？かもしれない。海外のエイサーは琉球国祭り太鼓の創作エイサーが派生して、各地域で踊り方のアレンジが加わっている」などのお話や、眞榮里さんの活動の経緯、地域の空きやの話題、沖縄の土着の宗教感について、沖縄（に嫁いだ）女性のジェンダーの話題、風習や死者への価値観についてなど様々な質問があった。オンラインツアーとはまた違った沖縄を知ってもらい考える場となった。



交流会の様子

【参加者の感想】

午前：「うるま市民として、知らなかった自分が恥ずかしいです。必ず行きます」「沖縄に居ながら麦畑があることも知りませんでした。素敵です」「ぬちぐすいまちまーい。の思いが伝わりました。ありが

とうございます」「沖縄に行きたくてたまらなくなりました」など
午後：「香ばしい香り、ぜひ現地に行って体験したいですね～！」
「私も今回事前に麦茶を購入させていただいたのですが、やはり香りは現地ならではかな～と思いました。」「私も小さいころプラスチックのストローがなかったので藁のストローでお飲みました」「素晴らしいツアー、ありがとうございます！脳内で麦茶の香り、堪能しています！」「南城市から参加しています。大学時代、平敷屋の友だちがいて、遊びに行くこともありました。その当時からとてもいい所だと実感していました。金武湾の海を船に乗せてもらったこともありました。真珠がとれましたよ。いい思い出がよみがえってきて今、幸せな気分になっています」「沖縄の風を感じました～ありがとうございました」など



本気の麦茶、香りは現地ならではの

【まとめ：実践者の学び・気づいたこと】

オンラインでより沖縄らしく、参加者にリアルツアーとはまた一味違ったイメージで楽しんでいただき、地域を知っていただけるツアーを体験してもらいたいという思いで取組みました。沖縄らしいツアーとは？というのと d-lab2020 のテーマ「ぬちどう宝」に紐づけて、「ぬちぐすいツアー」というテーマとなりました。私自身の気づきでは、地域生活圏の風土と歴史、今回ガイド役として参加していただいた眞榮里氏の想いや活動を通して、地域と隣り合わせにある米軍基地や戦争跡地を横目に見ながらも、その地域の人と人とのつながり（ゆいまーる）から醸し出される絆の部分や、おもしろいという心の部分も含めて「ぬちぐすい」なのだと思います。冒頭のアイスブレイクでの説明の中に、自然やおいしいものを食べて心と体が元気になるというのがありますが、別で意味を調べてみると、人の優しさに触れることも「ぬちぐすい」というのもあり、眞榮里氏がガイドとして伝えたからこそ「ぬちぐすいツアー」が今回生まれ、私も地域・地元にある何気ない歴史文化や近隣住民との繋がりが大切なんだと気づきました。またその視点が私にとって最大の学びとなりました。

【報告者】 新里聡

沖縄から「難民問題」を考える教材体験

発表者：金城さつき（大学非常勤講師）

日時：2月20日（土）15:30～16:40 参加人数：32名

【プログラム概要】

戦後の米軍基地建設と土地接収により結果として移民を選択した人々の経験に焦点をあて、沖縄から「難民問題」を考える教材作成・実践を行った。「伊佐浜強制土地接収から一部、ブラジル移民へ」（伊佐浜移民と呼ぶ）という事実に関心を当てた教材・実践を体験いただき、沖縄移民から難民について考え、難民問題をいかに自分事として考えられるか写真と体験記（手記）から読み取る。

【実施内容】

1) アクティビティ① フォトランゲージ

グループで1枚の写真を通じて、強制土地接収の様子と人々の気持ちを考えてもらった。3グループから共有いただき、台風、開発、60年代に米軍のヘリが落ちた後かという話がなされたということだった。その後、5枚の写真で伊佐浜での強制土地接収の様子を紹介した。

2) アクティビティ②-1 体験記

体験記「ワッター島や」という資料を書き手の新城さんがどうして「難民」と言ったのかを考えながら読み、グループ内で共有していただいた。全体共有では、自分たちの島なのに、様々な迫害にあい、奪われ、ある意味国外にいる状況だと感じた等の共有がなされた。

3) アクティビティ②-2

ブラジルへ渡った澤岬さんの資料を読み、沖縄移民は難民と言えるのかを考えながら各自で資料を読んでもらった。その後、感想と教材へのコメントをいただく予定だったが、時間が押してしまい資料を読んだところで終了。

【参加者の感想】

- ・「難民とは何か」をしっかりと理解した上で、沖縄の移民の難民性について考えることは、大変重要なことだと思います。
- ・沖縄と難民がどうつながるんだろうと疑問に思いました。「基地によって住居を失った人がいる」言われてみれば当たり前のことに気が付かなかったです。自国にも助けてもらえない。もともと住んでいた土地に帰ることができないという状況からは十分難民条件に当てはまってしまうと感じました。沖縄戦でも泣いて、土地を奪われて泣いてという史料の言葉がとても心に残りました。
- ・とても興味深い写真、読み物記事で、当時の様子や著者の気持

ちがよくわかる効果的な教材であった。一方で、このワークの目的は何なのか疑問が残った。このワークに登場した人々が難民であるかどうかを話し合っている際、私は、まさに一般的に難民と定義される人々と状況は同義だと思った。一方で、国内にいるのに難民と定義できるのか（国内避難民を難民条約の対象にするのかの論議のように感じた）、という意見が出て討議している時、それ以上話し合うのはあまり意味がないように感じた。定義なんてどうでもよい。この人たちの苦しみを汲み取ることが第一だろうと思った。このワークは、「難民」という講座で一般的な難民問題に触れた後、日本国内でも、そんなケースがあるよと難民問題は遠い国の話ではなく、身近な問題として、学習者にとらえさせるのが目的なのか、沖縄の民そのものの事象について学ぶのか時間的な制約もありよくわからなかった。それから、「難民」の定義を少し説明しただけで、今回の事象が「難民」にあたるかどうかを考えさせるのは、日ごろ難民問題に関心がある人対象でなければ、少々難しいと感じた。

【まとめ：実践者の学び・気づき】

沖縄から現在世界で問題となっている難民を、身近な問題に引き付けて考えられるような教材づくりをと、様々な方にご意見いただきながら、ブラッシュアップしていきたいと思い参加させていただいた。難民問題を身近なこととして学習者に考えさせたいのか、沖縄の課題を考えてもらいたかったのか目的は何か、また焦点をどこに定めるのかというご指摘もいただいた。

今回のねらいとしては、難民問題を身近なこととして考えられるように考えていたが、それは身近に難民（または難民性を持った人）が存在するというだけでなく、「難民」となった人々と学習者の立場性を考えるような視点を教材の中を含めたいという実践者の想いが盛り込まれ、目的や焦点が曖昧に感じられてしまったように思う。目的や焦点を当てる部分の整理、沖縄の人々の体験から難民（性）とはという普遍的な問いへのつなぎ、また社会構造の中で自分自身の立場性をも考えられるような問いの立て方、資料提示の工夫など、まだまだ検討すべきことはたくさんあるが、方向性を考える良い機会となった。

【報告者】 金城さつき

教育は未来の扉を開く？「町の自習室」ができること

発表者：田名彩子（町の自習室 首里城下町クリニック内） ゲスト：阿波連 ゆい（琉球大学）、
平田 幹（琉球大学） 日時：2月20日（土）15:30～16:40 参加人数：5名

【プログラム概要】

沖縄県の小中学生の「全国学力・学習状況調査」の経年結果と併せ、沖縄県の小中学生調査報告書概要より関連事情を提供し、学びに向かう力をどう育てるか（安心して勉強に向かえる貧困対策を含め）を、「町の自習室」の実践報告と課題を加えての説明。更に学習支援ボランティアの大学生2名をゲストに迎え、ボランティアに参加したきっかけやこれまで関わってきた上での感想などを話してもらい、3つのグループに分かれ意見交換をした。

【実施内容】

1) アイスブレイク（自己紹介）

A4用紙に出身の都道府県と氏名を書いてもらい参加型の自己紹介。

2) PPを共有してのインプット

沖縄県の小中学生の学力の低さと3人に1人が貧困状態にあるという深刻な結果、それに関連すると考えられる事情（進路未決定率：全国1位、高等学校進学率：全国47位、離婚率全国1位、10代出産：全国1位など）の中、教育機関では子どもたちの学びに向かう力をどう育てるかが課題となっており、県を挙げて“貧困対策”が欠かせない。一方、子育て施設の中で子どもの居場所や無料塾、放課後子ども教室について認知度の低さ、今後利用したい子育て施設の中で無料塾の割合が最も高い結果を報告した。

このような県の状況と発表者の子育て経験から、学びと学ぶ環境の大切さを感じ、発表者が働くクリニックを夜間開放して週2日、1日15名程度を想定し開所している「町の自習室」を紹介（中学生に安心できる場と大学生の学習支援ボランティア、100円の食事も提供）し、開所1年半で108回、利用延べ人数574人、学習支援ボランティア延べ人数217人（1回の平均利用者5.3名、学習支援ボランティア総計36名）の現況を報告した。

また同日時開所することになった那覇市の助成で運用している他団体ユイマール塾（小中学生対象）を併せて紹介した。魅力ある学びの場になるようミニ講座（JICA協力隊の体験談・今後は大学生と中高生のおしゃべり会）による工夫や学習支援ボランティアの声を紹介した。

3) 意見交換（グループワーク：ブレイクアウト）

話（インプット）を聞いての感想や質問、継続した「町の自習室」へのアイデアを各グループ出し合い全体でシェアした。感想として

は、沖縄の貧困事情等の数字に驚いた、あまり身近ではない存在から勉強を教わる環境があるのが良い、子ども食堂的な機能で利用できるのではないかなどが聞かれた。

〈質問や意見交換〉

①県内では貧困の実感はあるのか？

⇒那覇市社協からの回答：子ども食堂等に来る子を見る限りは大きく困っている印象はない、利用できる子は情報が取れており本当に困窮しているかはわからない、しかし子どもの居場所を通して地域との繋がりができていると感じている。

②利用者はどこから情報を得て来ているのか？

⇒発表者より、院内外の敷地内に掲示されたポスターを見て自発的に来ている。

③どんな学力の子が来るのか？

⇒ゲストより、意欲的な子が多く、現在の方法では本当に困っている子を拾い上げるのは難しいという印象を受ける。その後、本当に来てほしい子に来てもらうにはどうしたらいいか？という話がでた。

④中高生から勉強以外の相談はあるのか？家庭環境やバックグラウンドによって子ども達のいい刺激になるが居心地がいいほど家庭が大変とか、学びを力に次につなげるのかトータルサポートも考えているのか？

⇒発表者より、普段は保健師としてクリニック内や企業でカウンセリングなどしている。利用の子ども達ともそんな話もできたらと思っているが、中学生は特に大人にはバリアをはるところもある。年齢の近い大学生を接点である学習支援に置き、自身は「いつでもここにいる」という立場と場所として続けていきたいと考えている。

学びの場を表には出しているが、そのような利用の在り方もあるのではと考えている。それが表に出すぎるとその面が印象づけられるおそれもあるのであくまでもスタンスとしては学びの場としている。決まった曜日、時間にいつでもクリニック2Fの「町の自習室」には灯りがともっている。勉強に限らず何かのときに思い出して利用してほしい、と回答。

参加者から、開けていることに意義があるという方針は良いと思う。子ども達にとって居場所になるというところで既に開所の意義は達成されているので利用者の数を増やすことを目指す必要はないのでは、との指摘もあった。

このようなゆるやかな運営は珍しい。利用者もボランティアもゆるやかなのに対し利用の定着を促すのは矛盾もあり難しいのではないか。学習支援ボランティアも「教えなきゃ」ではなく「学生ボランティア自身の居場所になること」が定着に繋がるのではないか、学生ボランティアに少しお金がでると責任感が出て定着に繋がるのではないか、大学生同士のイベントやコミュニティなどがあると学生ボランティアの居場所にもなるのではないか、などの意見が交わされた。

【参加者の感想】

- ・自分が近所に住む学生だったら使ってみたい。発表者の専門を活かしながら貧困問題と学力問題、治安問題の解決に取り組むとても良い取り組みだと思った。モデルケースとして確立させて広がってほしいと思う。
- ・こんな多角的に支えていけるエンパワーメントスペースに発表者の新たな発想と行動力に力もらった思いがする。
- ・「町の自習室」という取り組みが面白そうだと思い参加した。病院の一角で、大学生ボランティアを巻き込み、美味しい食事(100円なのに豪華!ゲストの学習支援ボランティア大学生も喜んでいたので印象的)が用意された自習室の取り組み素晴らしいと思った。利用する中高生が継続的に来なかったとしても、ふとした時に思い出して足を運べるような、灯りがともし続けている場であればいいと思った。

【まとめ：実践者の学び・気づいたこと】

参加者の方々と意見交換し「町の自習室」は中高生の利用者定着を求めるのではなく、いつでもそこにある存在でありたいと思った。そのためには学習支援のボランティア大学生の存在は大きい。ボランティア大学生自身の居場所にもなってもらい視点が大事である。「町の自習室」がこれからも地域の学びの場となり、利用するすべての人の未来の扉となることを望む。それが地域に求められる居場所だと感じた。

【報告者】 田名彩子

事例検討：ワークショップで学ぶ沖縄戦

発表者：吉田 直子（東京大学大学院）、北上田 源（琉球大学非常勤講師／沖縄平和ネットワーク事務局長）

日時：2月20日（土）17:00～18:10 参加人数：29名

【プログラム概要】

知識伝達型の形式がとられがちである沖縄戦学習について、ワークショップ形式でも学ぶことができるのか、またそれによって従来の沖縄戦学習にどのような新しい視座を与えることができるのか、といった問いを検討するため、沖縄で修学旅行生などに平和ガイドを行うかたわら、学校現場での平和教育にもかかわっている北上田氏から、開発中のワークショップを紹介してもらった。また北上田氏の発表後、参加者からの質疑応答を受けた。

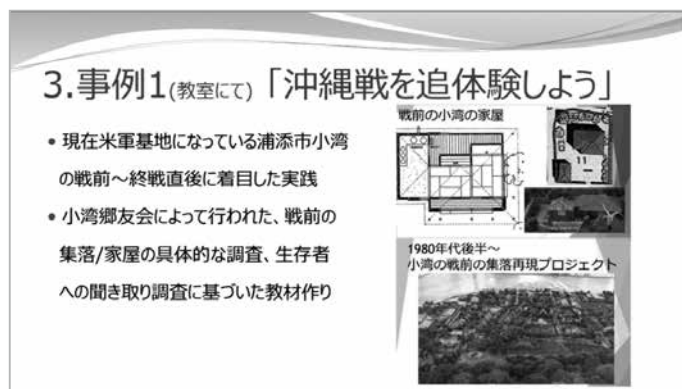
【実施内容】

1) 事前アンケートの実施、及び企画者の自己紹介

開始時間前に入室した参加者に対し、google フォームによる事前アンケートを実施し、参加者の属性を把握した。プログラム開始後は、企画者である吉田の自己紹介と本企画の主旨、発表者である北上田氏とのつながりについて説明した。

2) 北上田氏による事例発表

北上田氏から二つの事例が紹介された。一つ目は、現在米軍基地の一部となっている浦添市小湾住民の沖縄戦の経験をテーマにしたワークショップである。特徴は、沖縄戦のみならず、戦後の基地問題までを含む内容であること、地域でまとめられた市町村史や証言集などの活用により、追体験型のワークショップを構築できる可能性があること等が挙げられる。



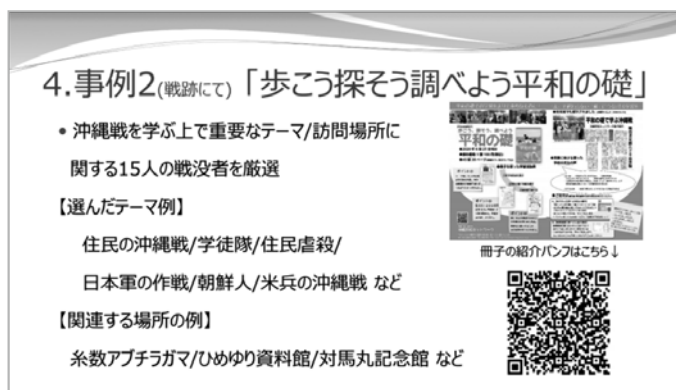
3.事例1(教室にて)「沖縄戦を追体験しよう」

- ・現在米軍基地になっている浦添市小湾の戦前～終戦直後に着目した実践
- ・小湾郷友会によって行われた、戦前の集落/家屋の具体的な調査、生存者への聞き取り調査に基づいた教材作り

戦前の小湾の家屋

1980年代後半～小湾の戦前の集落再現プロジェクト

二つ目は、平和祈念公園内の平和の礎での学習で使える冊子の紹介である。冊子でとりあげた戦没者の刻銘と、その経歴をたどることができるものである。ワークショップ型沖縄戦学習の課題も提示された。



4.事例2(戦跡にて)「歩こう探そう調べよう平和の礎」

- ・沖縄戦を学ぶ上で重要なテーマ/訪問場所に関する15人の戦没者を厳選

【選んだテーマ例】

住民の沖縄戦/学徒隊/住民虐殺/日本軍の作戦/朝鮮人/米兵の沖縄戦 など

【関連する場所の例】

糸数アブラガマ/ひめゆり資料館/対馬丸記念館 など

冊子の紹介パンフはこちら

3) 質疑応答

フロアからは、教材化にあたって使用した資料は一次資料なのかどうかという質問、各地の陸軍墓地と沖縄戦とのつながりを糸口に学習を始めるというアイデアの提示、小湾の実践に対してより詳細な質問が挙がった。

【参加者の感想】

- ・小湾の住宅の詳細まで記録が残っていることが軽く衝撃でした。家族構成等によって戦争体験者に生々しさが感じられて、それらの情報を通して少しではあるが沖縄戦について具体的に考えることができました。
- ・漠然とした知識を教えるのではなく、より具体的な事例をもとに考えさせるワークには、今後の可能性を感じました。

【まとめ：実践者の学び・気づき】

質疑応答でアーカイブを利用した教材開発に関する話題があがったが、それに応答しながら、改めてアーカイブそのものと現場での教育実践として使える資料との距離を感じた。専門的に整理されたデータを、学習のねらいや発達段階を踏まえた教材のデータとして使えるものにするためには、やはりもう一段階のデータ加工と、それをういた教材開発のイメージを現場の教員に喚起させるような提案力のあるコーディネーターの存在が鍵を握るのではないかと。

【報告者】 吉田直子

わった一泡盛で歴史・文化と交流がまざりあう！ オンラインツアー

発表者：新里聡（株式会社国際旅行社）、長嶺哲成（からからとちぶぐわー）

日時：2月20日（土）17:00～18:10 参加人数：約20名

【プログラム概要】

約600年前に誕生した琉球泡盛の歴史、文化、物語を講義と交流会を織り交ぜた内容でお届けする。からからとちぶぐわー店主でおきなわ食べる通信編集長、琉球泡盛クラブの会長でもある長嶺哲成氏をガイドとしてお招きし、専門的なお話を聞きながら、泡盛（新酒と古酒）を堪能しながら、参加者との交流も交えながらと泡盛アカデミーみたいな学びの要素と泡盛試飲体験を実施するプログラム。

【実施内容】

1) アイスブレイク

進行者（新里）よりご挨拶とまず初めに参加者への質問タイムを設けた。参加者全員へ向けて「泡盛のイメージ」を聞いてみることで泡盛の印象を伺ってみた。参加者からは「黒麹で作られる」「タイ米が原料」という造詣がある方からの回答や「ねっとりとした甘さが無くて大好き」「泡盛があるので、沖縄に越してきた」という感想があった。

2) 泡盛とはどんなお酒？

ここからは長嶺哲成氏がガイドとしてお届けするスタイルとなり、泡盛甕が並ぶお店の紹介、長嶺氏の自己紹介と、泡盛とはどんなお酒？という内容で15分実施。日本酒、焼酎、泡盛の麹の写真を見比べながら泡盛の黒麹の特徴（色の特徴、亜熱帯地域での酒造りは黒麹が適当）を紹介した後、江戸時代の幕府への献上品、ペリー来航時のフランス醸造酒ブランデーと比べてみるの感想、琉球王朝時代の古酒のたしなみ方など、原料から歴史に至るまでの内容となった。

3) 泡盛のおいしい飲み方

泡盛体験セットを事前申込者へご案内し、新酒と古酒のおいしい飲み方をご案内した。まず新酒はグラスに氷を入れてよくかき回しグラスを冷やす。そこに新酒を注ぎ新酒と氷をなじませる。そこへ水を注ぎ（新酒3：水7程度）ステアするとおいしい泡盛の完成。新酒は食事との相性がよく食中酒として愉しむ。その後は炭酸水での泡盛ハイボール、お湯割りの作り方を説明。古酒に関しては香りが広がるのに時間がかかるので、事前にちぶぐわーへ注ぎ20～30分程度置き、ちびちびと味わいながら上品な風味、コクとうまみを愉しんだ。

4) 泡盛古酒の魅力

泡盛の最大の魅力は古酒というお話から、なぜ魅力的なのかを

伝える。琉球王朝時代のお酒の重要性（中国や薩摩の役人を迎える迎賓の場で振る舞うお酒）、仕次ぎ（甕を継ぐ文化歴史）の伝統文化、士族家庭の泡盛が家宝として大切に守られてきたこと。それが戦争という悲惨な歴史で代々の仕次ぎ甕が途絶えてしまい、現在の仕次ぎ甕は戦後に作られたものが多いという現実。その泡盛が辿ってきた歴史背景と、泡盛古酒の香り（メイプルシロップ、チョコレート、バニラ、洋ナシみたいな種類によって香りが愉しめる）を合わせたのが最大の魅力という物語を参加者へ伝える。

【参加者の感想】

「古酒を育てられる平和。ということばですね」「ずっと平和で泡盛を飲み続けられたらいいな」「ほろ酔い気分で交流会に望みます！ありがとうございます」「沖縄へ、そしてカラカラさんへ行ける日を楽しみに、緊急事態宣言があけることを願います」「泡盛の飲み方を知れて嬉しいです。沖縄にとってすごく大切なことに気がつくきました」など

【まとめ：実践者の学び・気づいたこと】

今回、「泡盛」をどうやって参加者へ愉しみながら学んでもらうかをプログラム構成から考えた。最後に私から長嶺氏へ「泡盛を通してわいわいするポイントは？」と投げかけてみた。答えが、「世界にはおいしいお酒がたくさんあるが、古酒ならではの楽しみ方、歴史や飲み方を分かっているればそれを楽しみながら飲むことができる。泡盛の魅力は共有しながら飲む。知れば知るほど面白い」という内容と、「古酒を育てるためには平和でなければいけない。戦争が終わって、50～60年の古酒しかない。100年150年の古酒を作れる状態にしたい。家に古酒があれば、空爆するようなことはないのではないだろうか。沖縄の屋根の一つ一つの中に、100年古酒を作っている時代になればよい。沖縄の心を伝える絆となる。みんなで古酒を育ててもらいたい」というお話を伺った後、私自身旅行業に身を置き、国内外を巡り、沖縄の良さを知っている（つもり!？）なのにまだまだ発信しきれていないなという反省と、平和産業である旅行業に携わっている身なので、その考え方にとても共感を得ました。一方で、気づきとして「泡盛のように平和を育てて行けないものかな？」という考えを持つことができました。大それたことは出来ないかもしれませんが、小さなことからでも旅行業に携わってできることを思慮深く考え、仕事でもプライベートでも実践していくことが大事な私自身学ぶことができました。

【報告者】 新里聡

オンラインツアー 「街なかマングローブ、生きもの、人の暮らし」

発表者：金城明子（NPO 法人おきなわ環境クラブ）

日時：2月21日（日）13:00～14:10 参加人数：約20名

【プログラム概要】

那覇都心部にあるラムサール登録湿地の漫湖をフィールドに、豊かなマングローブ林と、絶滅危惧種のクロツラヘラサギをはじめとする水鳥、さまざまな種のカニや魚、貝などの水辺のいきものたちを紹介する。プログラムを通して沖縄の自然を感じ、漫湖のいきものと人々の暮らしを見つめ、自然と人間の共存について考えていく。

【実施内容】

1) 開始の挨拶、Zoom クイック投票

はじめに、どんな方々が参加しているのかを知る目的で、投票によるアンケートを実施した。その結果、質問1では「沖縄に住んだことがあるまたはよく行く」と答えた参加者が8割を占め、県外からの参加が多い印象を受けた。質問2では、沖縄の自然について「なんとなく知っている」と答えた参加者が半数以上を占め、よく知らないと答えた参加者は約4割、詳しいと答えた参加者は1割弱という結果になった。質問3では参加者が思う沖縄の一番の魅力について、「選べない」と答えた参加者が大半を占めたものの、沖縄の自然に興味関心があって今日のワークに参加されている方が多い印象を受けた。

2) マングローブ等の紹介

ここからはスライドを使って団体の紹介、漫湖の概要、そこで見られるマングローブの紹介や、鳥のクチバシやフィールドサインに注目した自然観察のポイント等について紹介した。

3) グループワーク：Jamboard* を使ったいきもの配置ゲーム

配布資料「いきものリスト」を参考に、20種類のいきものをJamboard上で配置していく15分間のグループワークを行った。特に正解等は設けず、ゲーム後の全体共有で簡単な解説を行ったが、時間の関係上全てのいきものの解説はしなかったため、参加者によっては不完全燃焼だったかもしれない。

4) いきもの豊富さと漂着ごみの問題

漫湖で見られるいきものを具体的な数字で示し、その豊富さをイメージしてもらったあと、ただ楽しいだけではなく、人間が対策をとるべき課題もあることを感じてもらう目的として、漫湖に漂着するごみの問題を紹介した。あわせて当団体で地域の人々と協力し、ごみ拾いなどの活動を行っていることを紹介した。

5) Zoom クイック投票アンケート、締め挨拶

最後にクイック投票を使って今日覚えていきたいいきもの数を尋ねたところ、「4-10個は覚えた」と答えた参加者が約半数と最も多く、次に「1-3個は覚えた」と答えた参加者が約3割と続いた。印象的ないきものに対し「あわもち」という声や、「生き物を並べたあとに、ごみをイラストに加えてしまうというワークがあると、少し意識喚起になるのでは？」という声があった。

【参加者の感想】

「沖縄の自然について学ぶ機会がこれまでなかったので、とても楽しく参加した」、「楽しく沖縄の自然を垣間見ることができ、ワークショップの仕方もヒントになった」、「せっかく沖縄開催なので選んだが、知らない生きものがたくさん出てきてとても楽しかった」、「さっそく訪ねたくなった」など沖縄の自然に対する興味への満足度を示す声や、逆に「環境と生態の話をもう少し詳しく知りたかった」という専門性を求める声があった。また「どうやったら海のごみが減らせるのか、という課題提起までつなげられると、次は開発教育の出番になる」、「教室に持ち込むには、もう一つ落とし所が必要」という次の一歩への提案の声があった。

【まとめ：実践者の学び・気づいたこと】

Jamboardを使ったワークは参加者に新鮮味を与え、楽しんでもらえたようである。一方、パソコン以外で参加するとJamboardの操作が難しいため注意が必要である。プログラムでは参加者の考えを引き出すところまではできなかったため、どうしたらごみを減らせるのかという課題提起や、教室での投げかけを考え、次に繋げていきたい。



【報告者】 金城明子

*Googleが開発したデジタルホワイトボード

ワークショップ「今日はフェアトレードの日!?!」

発表者：小池絢子、浪瀬佳子、野徳恵子、小橋聡枝、河野秀子、渡部市代（特定非営利活動法人 WE21 ジャパン） 日時：2月21日（日）13:00～14:10 参加人数：27名

【プログラム概要】

身近なフェアトレード品であるチョコレートを題材に、「フェアトレードとはどんなものか?」「本当にフェアな関係とは?」について考え、私たち自身が、消費者としてどのような選択をするかを考えるワークショップを実施した。具体的には、市販のチョコレートとフェアトレードのチョコレートの写真での比較からスタートし、生産地の写真を使ったフォトランゲージによって、フェアトレードの基準を伝え、最後に紙芝居を使ったワークショップによって、「消費者である私たちができること」を考えるディスカッションを行った。

※使用教材：開発教材「今日はフェアトレードの日!?!」

<http://www.we21japan.org/participation/workshop.html>



【実施内容】

1) チョコレートの食べ比べ

市販のチョコレートとフェアトレードのチョコレートの画像を用意し、パッケージの表裏、中身を見て頂き、どんな違いがあるかを参加者に挙げてもらった。

2) フォトランゲージ

チョコレートの生産地の写真3枚を見せて、気づいた点を参加者に自由に挙げてもらった。その後、各写真の解説を通してフェアトレードの4つの基準、フェアトレードラベルについての解説を行った。

3) 紙芝居ワークショップ

フェアトレード品を買ったことがあるかを問いかけた後、高校生の提案でフェアトレードチョコレートが実現するが中断してしまった内容の紙芝居を行った。物語の結末を変えるためには、どのように行動を変えればよかったかを各グループでディスカッションし、全体で共有した。

4) アクション宣言

当ワークショップでの気づきを元に、今日から明日からやってみようと思ったことを紙に書いてもらい、掲げてもらった。

【参加者の感想】

・開発教育を扱っていく際に、現実で起きている事実を伝えるために、ショックを受ける内容が多く、どうしても苦しい気持ちになってしまうことが多いが、すでにある仕組みをどう広めていくかに注目することでポジティブにより具体的なアクションにつながりやすいと体験から学んだ。

・入門としては良い内容だったが、フェアトレードの基準や仕組みについて、より具体的に知れる場があったら良いと思った。

【まとめ：実践者の学び・気づき】

フェアトレード商品を購入したことがある参加者が大半で、紙芝居のワークショップでは様々なアイデアが出て良かった。特に親子両方へのアプローチとして、戦隊物やドラマがアイデアとして出たのは面白かった。

フェアトレードがどんなものかが分かって良かった、という意見と、より深い情報を知りたかったという意見があった。当教材は入門編の内容なので、もっと詳しく知りたい参加者への参考文献や資料を紹介しても良いと感じた。

全国からの参加者とワークショップが実施できたのはとても良い経験となった。

【報告者】 小池絢子

金武魂を受け継ぐ若者たち 「ちばりよー!うちなーにーせーたー」

発表者：仲村明、島袋桃緋、安富春香（金武町若者ネットワーク委員会）

日時：2月21日（日）14:30～15:40 参加人数：10名

【プログラム概要】

小さな町で活動している金武町若者ネットワーク委員会の、団体設立のきっかけから、過去2年間で開催したイベントについて、参加者に共有。地域に根ざしている若者団体の今後の次世代への継承について、参加者同士で情報共有と意見交換を行った。

【実施内容】

1) 自己紹介

2つのグループに分かれ、ブレイクアウトルームにてお互いの自己紹介を行った。

2) 金武町について紹介

金武町若者ネットワーク委員会の本拠地である、金武町について紹介。クイズ形式で、金武町の町の規模、街並み、青年海外派遣事業について紹介した。

3) 団体について

金武町の若者を繋ぐために設定した行動指針である、学びの場作り・コミュニティづくり・まちづくりの3つの指針について説明する。過去に開催した2つのイベントを通して、どのように町へ還元できるよう目指していたかと、そのイベントの結果を共有。

4) 共有会

参加者が知っている若者の団体や、金武町の町の特徴の情報をもとに、参加者同士で次世代継承の課題を克服するために、どのような取り組みが必要かについて意見をシェアして頂く。ターゲットの世代である中高生の世代はどのようなことに興味があるのか等の、中高生目線からの視点や、町内での活動にとどまらず、金武町の若者代表として町外でも活動し、町民からの支持をより得られ

るようにする視点など様々なアイデアを共有した。

【参加者の感想】

・なによりも楽しそうに取り組んでいるのがいいなと思いました。そのつながりをいかして様々な取り組みができそうだと感じました。今ならオンラインでの交流やルーツを探すなどの探求型の学びもできそう。

・ほんと頑張っています、頼もしいし、何とも応援したくなった。
・小さな集団にありがちな継承者の問題、とても参考になる意見を聞けました。ここの活動を継続的に支援していきたいと思いました。

【まとめ：実践者の学び・気づき】

共有会にて、今後の当団体の発展に繋がるご意見をとても多く頂くことができ、とても貴重な機会となった。町内のみならず、金武町の若者代表としての町外での活動にも視野を広げることで注目を集め、より町民にご協力頂けるよう努めていきたいと団体内で思いを固めた。

【報告者】安富春香



写真と映像からよみとくルワンダ —視点を広げる問いづくり

発表者：山本康夫（ふくいグローバルネットワーク）

日時：2月21日（日）14:30～15:40 参加人数：約30名

【プログラム概要】

ルワンダをテーマに動画を用いて視点を広げ、理解を深める問いづくりのワークショップを実施した。ねらいは、①ルワンダに対して関心を深める、②視点を広げ、理解を深める問いづくりの視点を養う、③対話を通して視点の多様さや違和感に気づく、の3点である。ルワンダのイメージを共有し、次にルワンダで撮影した動画を音だけを聴いてイメージを想像し、映像が伴った時との違いを体験した。それから、ルワンダの動画を見ながら問いづくりを行い、その問いを「知る」「考える」「行動する」問いに分類しながら理解を深める問いづくりについて理解を深めた。

【実施内容】

1) ルワンダのイメージ（アイスブレイキング）

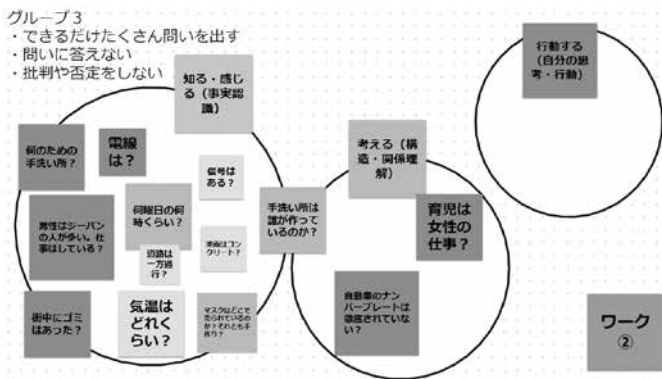
ルワンダのイメージをキーワードでA4の紙に書き、グループに分かれて自己紹介とともに共有した。

2) ルワンダのおと（音からの想像）

市場の動画（1分程度）を用いて、最初に音だけを聴いて、場所や人やものの様子などをイメージした。次に同じ動画を映像とともに見て、音のみとの違いや思い浮かんだ問い等を話し合った。

3) ルワンダの風景（問いづくりと問いの分類）

町の様子動画（1分程度）をみながら問いづくりを行った。できるだけたくさん問いを出してグループごとに共有し、再度映像をみて問いを加えた。それから出した問いを「知る」「考える」「行動する」問いに分類した。



【参加者の感想】

・視点を広げる問いづくりというのはとても面白い観点だと思った。

問いを分類するという発想は自分にはなかった。自分がどのような問いを持つのかを客観的に知ることが面白かった。ただ、時間が少なくて、それを今後どのように活かすのかというところまで考え合える場面があるとよかったかなと思った。

・「問をつくる」という行為を通して、気づくこと考えさせられることがあることに驚いた。学習者による質問を投げかけることばかりに気を取られていたが、「問づくり」事体にとっても意味があることに気づかされた。とても奥が深い。

・ルワンダとつながっていること自体に感動した。「音」から想像させた上で動画を観るといのは、動画を観る際の注意力が増すのでとても面白いやり方だと感じた。参加者の方とのグループセッションから得られることが多かった。

・ルワンダと聞いて虐殺のイメージが強く他には知らなかったのですが、ルワンダの日常を切り取ったものが見られて非常に面白かった。音声だけからのイメージからは始まり、問いを立てて考えを深めていくプロセスがおもしろかった。問いの立て方に興味があったので、短い時間だったがステップがイメージできて勉強になった。ルワンダからのご参加でつながっているのもオンラインの醍醐味でよかった。

【まとめ：実践者の学び・気づき】

写真と映像との違いの一つが「音」の有無であり、前半のワークでは音のみ、そして映像を伴った動画の視聴というステップを踏むことでその違いを感じるとともに、音に焦点をあてて考える視点をもつことができた。後半のワークでは、動画の視聴から問いを考えて共有することで、人によって問いの視点が異なり、視点の広がりを感じる機会となった。

また、「知る」（事実認識）、「考える」（関係理解）、「行動する」（自分とのつながり）問いの分類を行うことで、動画を通じた問いづくりの傾向がみてとれた。

時間が足りず叶わなかったが、つくった問いを通して何を理解したいかを考え、「知る」→「考える」→「行動する」問いへと深める問いづくりやカテゴリー間の関係性を話し合うことができれば、より学びのある機会になったと思う。

時間の制約上、ルワンダについて話す時間を設けなかったが、基本的な解説があると理解を深める問いがでてくることが予想された。また今回はロックダウン中でライブ映像を使用できず、ネット環境の不安定さもあり、それらの対応も今後の課題として考えていきたい。

【報告者】 山本康夫

私が選んだソーシャル・アクション ～ アクションするから社会が変わる ～

発表者：林 良昭（国際理解研究会 みなみの風）

日時：2月21日（日）16:00～17:10 参加人数：25名

【プログラム概要】

教育活動としては、「知ること、考えること」が重視されるが、その目的は、学びの先にある社会参加、公正で共に生きる社会づくりへの参加である。ソーシャル・アクション事例集（『Social Action Handbook：テーマと出会い・仲間をつくり・アクションの方法を見つける39のアイデア』（2017年、開発教育協会発行）、以下ハンドブック）の中から、参加者それぞれがはじめてチャレンジするソーシャル・アクションを選び、どのようにアクションするか発表し合い、意見交換した。プログラムのねらいとしては、ソーシャル・アクションを実践することによって、主権者とは何か？を考え、主権者としての自覚を促すことである。

【実施内容】

1) テーマ

本自主ラウンドテーブルでは、「お互いをよく知りあう」こと、「自分のソーシャル・アクションを見つけだす」こと、「ホストの私が選んだソーシャル・アクションの紹介」の3つを主なテーマにした。

2) 「お互いをよく知りあう」

用意した紙に、上から名前、今いるところ、参加した動機、自己アピールを記入していただき、グループに分かれて記入した紙を見せ合って自己紹介をしてもらった。

3) 「自分のソーシャル・アクションを見つけだす」

ハンドブックに載っている「アクション事例集」から、はじめてチャレンジするアクションをひとつ選んでもらった。名前・選んだアクション・選んだ理由・明日からの計画書を書いた紙を見せながら、グループに分かれて説明してもらった。

4) 「ホストの私が選んだソーシャル・アクションの紹介」

私（林 良昭）が選んだソーシャル・アクション④企業に質問してみる（企業だけでなく、政府や自治体、団体などにも）を紹介した。約5年にわたり10の団体や企業に行ってきた質問活動の中で、国際協力機構（JICA）の現地住民の反対運動が起こっているプロサバナ事業（モザンビーク）の土地収奪についての質問のやり取りを紹介した。

5) 最後に

全国で提起されている約30にのぼる集団訴訟の中でも最大規模の約4500人の原告団が原状回復を要求して闘っている「生業（なりわい）を返せ、地域を返せ！」福島原発訴訟について、（去年9月30日に初めて高裁段階で国の法的責任が認められた）原告弁護団の馬奈木厳太郎（まなぎ・いずたろう）弁護士の言葉をビデオで紹介した。馬奈木弁護士は、生業訴訟が問いかけるものとして、「何も悪いことしていないのに、こんなひどい目にあったでいいのか」と原告団を含めた私たちに問いかけている。「生業を返せ、地域を返せ！」福島原発訴訟の最終的な目的とは何か、についても語り掛ける。

【参加者の感想】

・アクションの具体的な成果を聞くことができ、とてもよかったです。そうした成功事例のアーカイブ化、必要だなと思いました。そのことで、「本当に変わるの?？」と思う人たちを勇気づけられるのではないかと思います。

・教材（冊子）を買っていたが、使いこなせてなかったので、参加した。林さんの実践の事例がとても面白かった。開発教育協会で、ぜひソーシャルアクション事例集を作って欲しい。

【報告者】 林 良昭



『Social Action Handbook: テーマと出会い・仲間をつくり・アクションの方法を見つける39のアイデア』（2017年、開発教育協会発行）

SDGs 教育目標についての 日本政府への提言書を作ろう

発表者：三輪敦子 (SDGs 市民社会ネットワーク)、中村絵乃 (DEAR)、
三宅隆史 (シャンティ国際ボランティア会) 日時：2月21日 (日)16:00~17:10 参加人数：25名

【プログラム概要】

日本政府は毎年 SDGs アクションプラン (2017 年より) という SDGs 達成の国内行動計画を策定。このプログラムでは、SDGs 4を達成するために、国内の教育課題を明らかにし、政府に提案する策を検討。議論の成果は DEAR と教育協力 NGO ネットワーク (JNNE) が「SDGs 市民社会ネットワーク」の教育ユニットの世話人として作成する「SDGs ボトムアップアクションプラン (日本政府への提案書)」と「市民社会レポート」に活かしていく。

【実施内容】

1) 発表

SDGs ジャパンの概要：SDGs の達成を目指して行動する NGO など市民社会組織が中心となって設立し、現在は140余りの組織とともに政策提言活動や広報啓発を行なっている。目的は SDGs の理念に添い、みんなの居場所がある平和で公平な豊かな社会を創ることで、事業は政策提言、地域や他セクターとの連携、SDGs の普及啓発である。

SDG4 についてのこれまでの提言内容は、提言①外国にルーツを持つ子どもの学習権、移住労働者を含む日本語の読み書きに苦勞している人々への学習支援 (夜間中学など) の強化、提言②障害のある子どものインクルーシブ教育の実現、提言③ジェンダー平等教育の推進、提言④学校における体罰やいじめなどの暴力の根絶、提言⑤教育予算増による私費負担と教員の長時間労働の軽減、提言⑥「ESD for 2030」の国内実施計画の策定であった。

2) グループおよび全体での議論

上記提言内容を改善、追加するために、5人程度のグループに分かれて、議論した。その後、全体に発表を行い、全体で議論した。

提言①については、学校現場ではプライバシー保護への配慮から子どもの国籍を記載した文書はなく、教員が本人に聞くしかなく、実態把握が困難であること、そもそも外国籍の子どもには就学通知が行政から送付されないこと、「外国にルーツを持つ」子どもには、外国で育った日本人も含まれること等があげられた。

提言②については、在宅の障害児に対する子どものケアがほとんど行われていないことが指摘された。

提言③については、ジェンダー平等に加えて、LGBTQ +、SOGI (性的指向と性自認) という考えに基づいた包括的な人権教育が必要、教員に対する人権教育が必要といった意見が出された。

提言④については、教員による性暴力の根絶がまず必要、不登

校の子どもに対するケアが不十分で、学校に戻らなくても良いという政策があるにもかかわらず、教員は戻って来いと行っていることの問題が提起された。

提言⑤については、スクールカウンセラーを増やしても教員の負担は増加するので、教員数の増加がまず必要等の意見が出された。また提言内容に追加すべきこととして、子どもの自殺率の増加、ユースワークやオールドナティブ教育の充実があげられ、活発な意見交換が行われた。

【参加者の感想】

・現場の教員の方の声を聞いたり、自分の関心の強い箇所を伝えたり、とても有意義な議論ができた。

・政策提言を作るという作業がどのようなものか知りたかった。広い意味を含めた提言は抽象的になり、様々な受け止め方をされてしまうという矛盾の中で当事者の気持ちを伝えるプロセスも大切と思った。

【まとめ】

当事者である子どもや教員の声を提言に反映すべく努力していきたい。

【報告者】 三宅隆史

蚊媒介性感染症対策における 市民科学の実践と可能性

発表者：齊藤美加（琉球大学医学研究科）

日時：2月20日（土）15:30～16:00 参加人数：13名

【プログラム概要】

世界で最も人を殺している動物は蚊である。世界では、蚊媒介性感染症により年間約70万人が亡くなると推定されている。現代では、経済社会のグローバル化、気候変動、戦争や災害等での土地利用の変化などにより、蚊媒介性新興感染症の発生リスクが高まっている。現在、人類が未曾有の新型コロナパンデミックを経験しているなかで、過去の人類史における感染症対策から学ぶことの重要性は増しており、蚊媒介性感染症についても新たな対策アプローチが求められている。

我々は2018年より、沖縄本島北部に位置する宜野座村松田区において主に小学生を対象に、「松田ガジャンサイエンスクラブ（ガジャンは沖縄で蚊）」を実施し、学び、計画、調査、分析、対策、発信を行なっている。市民が「サイエンス」を手に入れ、自らの地域を調査分析し、蚊による感染症のない安心安全な地域づくりに活かせるか、そして自発的発展は地域の感染症に対するレジリエンスを上げることができるのかについて、これまでの実践を報告した上で参加者と共に考えたい。

【実施内容】

1) 蚊媒介性感染症と One Health について

世界で最も人間を殺している動物は蚊／新興感染症の75%は動物由来／21世紀に解決すべき社会課題である戦争や災害、食料危機による森林破壊とグローバリゼーションによるヒトとモノの移動の変化、地球温暖化が、新興感染症出現の要因となる／この時代だからこそ、One Health 概念が重要となる。人間と家畜と野生生物、環境の健康は一つという概念はSDGs達成のために、必要だ。

2) 過去に学ぶ

歴史と伝統知からの教訓／沖縄の伝承知を今に生かす取り組み／八重山のマラリア史を今に生かすことの重要性

3) 現在に生かす

シチズンサイエンスの実践／松田ガジャンサイエンスクラブの紹介／シチズンサイエンス（市民科学）の実践による安心安全な地域づくり／松田ガジャンサイエンスクラブの活動／JICA 感染症コース参加者と交流／ハワイの中学校サイエンスクラブと交流／成果報告と情報発信について（松田ガジャンフェスティバル）／行動変容調査について

4) 未来へつなげる

共に生き延びるために必要な視座／感染症対策におけるシチズンサイエンスの可能性

【参加者の質問・感想】

・多言語版「八重山のマラリア史」は公開されているのか。

→もうすぐ公開です。ご利用ください。（2021年3月現在）

<https://storymaps.arcgis.com/collections/b8f0dcc7c52746e8837e9aecb1833db0>

・（「八重山のマラリア史」のサイト）情報が見やすくて画像もたくさんあるので公開が楽しみだ。

・沖縄は感染症の経験が豊富であることや、それらを克服してきた歴史というのは、未来に活かされるべきだと思う。

・興味深い活動。いま世界的にはワンヘルス（人間・野生生物・環境は共通する健康）の取り組みが広がっている。関連情報を添付する。

・ワンヘルスはこれから本当に重要な概念である。

・参加された小学生へのその後の影響なども気になる。ぜひ継続的に成果を知りたい。

【まとめ：実践者の学び・気づき】

質疑応答の時間が取れず、大変残念でしたが、興味を持っていただけのこと、感謝しております。沖縄から感染症を発信する意義を改めて感じる良い機会となりました。来年、八重山のマラリア撲滅（排除）60周年を迎えるにあたり、八重山のマラリアの歴史は、より多くの方に知っていただこうと思います。また、社会課題解決に向けたESDを目指し、シチズンサイエンスを紹介できてよかったと思っています。

【報告者】 齊藤美加 【記録者】 島袋美由紀

公立高校の沖縄修学旅行 ～事前学習から事後学習まで～

発表者：中園真由美（東京都立農芸高等学校 教諭）

日時：2月20日（土）16:15～16:45 参加人数：7名

【プログラム概要】

修学旅行は誰の学校人生でも一番の思い出として記憶されているような一大イベントである。東京都立の農業系高校の2年生たちはコロナ禍直前の2020年1月12日から15日まで3泊4日の沖縄修学旅行を行った。「沖縄」という様々な側面を持つ豊かな素材を十分に生かした旅にするには？単なる「南国の海のきれいな観光地」としてでない沖縄を生徒たちの心深く残す旅にするには？

実施1年前から準備をおこない、月に一回ペースでの事前学習や、現地での工夫など、十分でない資金面などの制約がありながらも、様々な人々の協力と助言により乗り切った約一年間の奮闘の顛末と生徒たちの様子を紹介する。

【実施内容】

1) 発表者による実践研究報告

- 皆さんの修学旅行の思い出は？ → 東京タワー、ディズニーランド、京都、スキー
- 誰にとっても高校時代の一大イベントである修学旅行、農芸高校30年度入学生について、その事前学習から、実施内容、事後学習までご報告。
- 今回の修学旅行の目的 ①平和学習 ②沖縄の今を知る
- ③沖縄に心を残す
- 事前学習での工夫（沖縄びーすふるワークショップ、北部農林高校との交流に向けて、ひめゆりの塔への千羽鶴奉納準備など）
- 実施当日の工夫 ①千羽鶴奉納 ②北部農林高校との交流
- ③比嘉光龍さん講演会
- 事後学習について → コロナ禍の休校により実施できず
- 生徒の感想紹介

2) 質疑応答

Q 実施できなかった元山仁士郎さんの講演会は、どのようにつながってどのようなお話をさせていただくことになっていたのか。

A 中野区での講演会にたまたま参加し、その場で修学旅行のことを話し、講演を依頼した。快諾をいただいた。

内容としては、沖縄を見てきた高校生に向けて、現在の沖縄を生きる若者として、現代の沖縄問題を語ってほしいとお願いしました。

【参加者の感想】

・広島県の教員時代修学旅行先が沖縄だったので事前準備の情報等とても懐かしく参考になった。

・いつも事前学習や事後学習はどのようにされているのだろうと想像しながら、その実態を知ることはできなかったのが、具体的に何をされているのかを知ることができてよかった。修学旅行で、学びを得てもらうために色々工夫をされていることがわかった。先生のこのような熱意は、生徒たちにも伝わっているのではないかと心配だ。

・先生の熱意と行動力によって、幅広いテーマを学んでから、沖縄修学旅行を実施していることに驚いた。ただ、そういう先生が現場を離れたら、定年を迎えたりすると、途絶えてしまうのではないかと心配だ。

・とても勉強になった。以前、沖縄に修学旅行へ行かせたが、十分に事前学習させていなかったと反省している所で、とても参考になる事例を提示していただき、大変ありがたい。

【まとめ：実践者の学び・気づき】

初めてのZOOMを使用した発表を体験した。なかなか手順に慣れていなくてスムーズにいかないところもあり、難しさを感じた。また、参加者の顔を見ることができないので反応が分からず、独り相撲を取っているような感覚だった。あらかじめ資料を渡しているのだから、説明は最小限にして、ご意見や感想をお聞きする時間をもっと取った方がよかったのかな、とも思う。後に感想が送られてきて、伝えたいことは伝わっていると分かり安心した。今後はZOOM会議の技術をもっと身につけたい。

【報告者】 中園真由美



東アジア平和大使プログラム実践報告

発表者：長川美里 (Wake Up Japan 理事)

日時：2月20日(土)17:00～17:30 参加人数：5名

【プログラム概要】

2020年6月より立ち上げた通年のプログラム実践報告を実施。東アジア地域における、草の根からの平和大使の輪を広げること、過去の歴史的・政治的要因に基づいた日中韓の関係性を今一度客観的に見つめ直し、自分なりの東アジアに対する、多様な時間軸（過去・現在・未来）と他者への痛みを基軸とした、まなざしと姿勢を養うことを目的としており、受講者の様子を見ての学びの棚卸、コロナ下での平和構築関連のプログラムデザインの難しさ、その中で見えた次年度の展望について報告した。

【実施内容】

1) 団体・企画責任者

冒頭に団体と報告者について簡単に紹介。本プログラムにおいては、報告者が学生時代の個人の体験に基づき、2010年より持っていた東アジア地域に対する平和への願いを元に、企画立案を2020年に行っている。

2) 東アジア平和大使プログラム（全体像）

報告者のビジョンである、「東アジアの次世代が（地理的に）近くて、（心理的に）遠いと次世代が言わない社会をつくる」をきっかけにはじまった本事業は、3ヵ年のプログラム全体構想であり、2020年度をPhase1（基盤構築）と位置づけている。

3) 2020年度事業詳細

2020年度は6月から2021年2月（本報告を含む）まで、11月を除いて、毎月本プログラムを実施。ターゲットは10～30代中盤の、草の根レベルで東アジアの平和構築に興味・関心を持つ人々とし、年間64名（※プログラムに実際参加しなくとも、興味関心を持ち、問い合わせや申し込みを行った人数もカウント）を巻き込んだ形となった。8月の回を除きほぼすべてがオンラインでのゲスト・参加者の対話形式で実施され、人・場・知/声という3つの視点で振り返りを行った。

3) 2021年度へ向け

3つのポイントとして、異なる立場や視点をどう取り入れ実際に人を巻き込んでいくのかという場の多様性の観点、そして例えば台湾・香港・朝鮮をどう捉えるかという東アジアの捉え方、最後にどのように参加者と持続的にプログラムを構築しコミュニティ設計を行うかという点が挙げられた。

【参加者の感想】

- ・沖縄にとっての「靖国」は特別な場所。どういう位置付けで、靖国を歩いたのか？また、報告者自身の靖国に対する個人的なポジショニングは気になる。
- ・実際に靖国を歩いた方は、どんな思いを描いたのか？
- ・64名の参加者の詳細（国籍等）を教えてください。
- ・東アジアの人とは仲良くなれるのに、「国」になるとどうしてうまくいかないのだろう。

【まとめ：実践者の学び・気づき】

客観的な意見を得るという観点で気が付いた事を2点述べたい。

一つ目は、政治的・歴史的な枠組みから切り離せない事があるプログラムだからこそ、設計の意図や背景、そしてその後の訪問から何を得たのか、企画者としては、少なくとも様々な個人が抱える視点を踏まえた上で言語化できる必要があるという事。これは靖国訪問（※参拝ではなく、自由に歩いて頂く）の回に関する質問を受けた際の気づきである。いかなる政治的・宗教的な思想の方も受け入れるという前提のもと、「8月15日という日に、靖国神社の雰囲気を感じ、日本の戦争の記憶について考える」という場づくりを目指していたが、それが多様な参加者に対してどのような違いを持つのか、また参加後にどのような変容が見られたのか、報告者として話せるとよかったのではと気が付いた。

二つ目は、個人としての特定の社会課題に対するポジショニングをどのようにとっていくか（もしくは取らざるべきか）という観点。ある参加者から、仮に私達が意図しなかったような政治的な過激な思想を持った際に、企画者としてどのように対処するのか、と問われた。初年度の本プログラムの参加者は、ある意味企画者と近い思想（国際社会に興味関心を寄せ、外国人の友人がおり、国同士の交流に積極的）を持った集まりであった。プログラム内なのか、外なのか、で対応の仕方も変わってくるのかもしれないが、改めて個人として、団体としてどう対応するのか、明確な想定を持ちたい。

【報告者】 長川美里

18 歳成人時代の成人式と高校教育

発表者：田中治彦（上智大学）

日時：2月20日（土）17:45～18:15 参加人数：約10名

【プログラム概要】

民法改正により2022年度から成人年齢が18歳に引き下げられる。それに伴い成人式も18歳時点で行なわれるべきにもかかわらず、多くの自治体は20歳での「成人式」を続けることを発表している。これには法的な根拠がないばかりか、「通過儀礼」としての民俗学的な意義もない。

18歳成人の時代になると、高校が「子どもから大人への移行」の最終段階となる。従って、高校教育において「大人になるための教育」が求められる。それは、主権者教育、消費者教育、グローバル市民教育として構想されるであろう。

2022年度に公立高校に導入される『公共』『探求』などの教科領域と、既存の関連教科によって教えられるものである。「大人になるための教育」が十分なされた段階においては、高校の卒業式こそが「成人式」になることが望ましい。なぜなら、法的成人年齢である18歳時であり、民俗学的にも通過儀礼の条件である試験（入試と就活）と祝福（卒業と入社・進学）を兼ね備えた式典となるからである。

【実施内容】

パワーポイントを使用して以下の内容を報告した。

- ①成人年齢と通過儀礼
- ②成人式の起源
- ③浮遊する成人式
- ④18歳選挙権と18歳成人
- ⑤18歳成人時代の成人式と高校教育

参考：田中治彦（2020）『成人式とは何か？』岩波ブックレット



【参加者の感想】

参加された方から次のようなコメントがあった。
「成人式の歴史について理解が深まりました。高校教育の3つの分

野について現在どのように取り組みがされているのか、もっと知りたいと思いました」

「成人の意味が整理できた。高校生自身が自覚を持たせるような教育が必要だと思った」

【まとめ：実践者の学び・気づき】

成人式についてその歴史、当初のねらい、現代における目的のずれ、今後の課題などについてはご理解いただけたと思う。18歳成人になった際の高校教育への影響について関心が高いと思われるので、機会をとらえて引き続き問題提起していきたい。

【報告者】 田中治彦

普遍的な「グローバルなものの見方」の育成についての考察

発表者：大塚 圭（中央大学杉並高等学校）

日時：2月21日（日）13:00～13:30 参加人数：15名

【プログラム概要】

2015年に国連で「持続可能な開発目標（SDGs）」が採択され、そのターゲット4.7には、「全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする」と明記されている。ターゲット4.7におけるこのような普遍的価値概念の育成を推進する枠組みがグローバル教育である。その目的を端的に言えば、環境、開発、人権、平和、多文化、持続可能性などの問題について「グローバルなものの見方」を身につけることである。しかし、グローバルなものの見方を育成するための前提となる各国のものの見方は、どのようにグローバル教育の実践に影響するのだろうか。本研究では、こうした課題意識に基づいて行った日本とキルギスにおける高校生ものの見方についてのアンケート調査を分析することで、グローバルなものの見方を育成するために重点を置くべき側面や方法について明らかにし、グローバル教育の国や地域による独自性の意義を提示する。

【実施内容】

1) 背景

普遍的価値を共有するグローバルなものの見方を実現するためには、各国の教育事情や歴史的・文化的背景を考慮してグローバル教育を展開する必要があると考えた。

2) 研究方法

日本とキルギスにおける高校生ものの見方についてアンケート調査・分析をした。アンケートの内容は、外国についてどのようなイメージを持っているか、グローバル化・グローバル社会をどのように認識しているかなどを中心に構成した。

3) アンケート結果

アンケートの分析から、日本とキルギスの高校生に関してグローバルなものの見方を育成するために重点を置くべき側面や方法について留意点を得ることができた。

4) 考察

日本の高校生は、比較的グローバル社会を自身にとって可能性の広がるような肯定的なものの見方をしていた。一方、キルギスの高校生は、グローバル社会を解決すべき問題であると否定的に捉えるものの見方があった。

【参加者の感想】

- ・現状の分析がされていて、そのうえで対策が示されていて、非常に学びになった。対象の傾向を分析し、その方法を探るということを社会教育を実施する上でも参考にしていきたい。
- ・貴重な視点からの学びが得られて聞いていて楽しかった。

【まとめ：実践者の学び・気づき】

SDGsのターゲット4.7は、ESD、人権、男女の平等、平和の文化、地球市民性、文化の多様性などの普遍的価値概念における知識及び技能の習得を目指している。このような価値概念の習得は、一定の普遍性をもっていると考えられるが、同質性を強調するあまり、国や地域による独自性を無視することはできない。国や地域による独自性のあるグローバル教育の重要性を改めて実感した。今後は、それぞれのコンテキストへの意識を強くしたカリキュラムや教材開発を行いたい。

【報告者】 大塚 圭



言語教育とESDの融合： オンライン日本語教育の事例

発表者：田村 美香、田中 迅（九州大学）

日時：2月21日（日）13:45～14:15 参加人数：15名

【プログラム概要】

SDGsの17の目標で取り上げる社会や環境の問題について考え、対話しながら、日本語を学ぶ「プログレッシブ日本語I & II」の事例紹介をした。この授業は、外国語教育で最近注目を浴びているヨーロッパの複合言語主義を基盤とするCLIL(内容言語統合型学習)の枠組みで、学部生から博士学生までの多国籍の留学生が、SDGsの目標を題材に社会や環境の問題と日本語を同時に学んでいる。今回の発表では、講師とファシリテーター(大学生TA)の協働による外国語教育とESDの融合教育の実際と有効性について報告した。

【実施内容】

1) 発表者と授業の紹介

授業の趣旨、受講者のバックグラウンド、受講者へのグランドルール、授業のスケジュール、1モジュールの構成などについて説明を行った。秋学期のプログレス日本語IIでは、SDGsの8つの目標(10、4、8、7、15、2、1、6)を取り上げた。8つのモジュールでは、それぞれ2日間で構成され、DAY1ではSDGsゴールに関連する社会、環境課題、DAY2ではグッドプラクティスに焦点を当てた。

2) 教育手法と授業の内容

この授業で使用した言語教育の手法CLIL(内容言語統合型学習)とESD(持続可能な開発のための教育)の概要を紹介し、授業で具体的に使用したゲストスピーカーによるミニ講義の効果と社会対話「環境カフェ®」のオンラインでの実施方法について説明した。

3) アンケートの結果

学期末に実施した授業アンケートの結果について、受講者のコメントも含めて報告した。この日本語の授業とCLILを用いた指導法について、全員の受講者が満足しており、そのうち8割近くが非常に満足をしていることが明らかになった。しかし、CLILを用いた授業の有効性に関しては全員が役に立つと答えているが、そのうち非常に役に立つと答えたのは6割弱にとどまった。具体的に、SDGsの課題について、考えたり、他の受講者と意見交換をしたり、ゲストスピーカーの新しい試みについて話を聞いたりなどが、役に立ったと回答した受講者が多かった。

4) まとめと今後の展望

アンケート結果より、「日本語を学ぶだけではなく、日本語で考え、日本語で学ぶことを重視し、将来日本語で専門科目を学ぶための準備をする」というCLILの教育目標は十分に達成できていると言える。しかしながら、SDGを自分ごと化するという点、身近なところから取り組むということなど、ESDに基づいた教育については、まだ十分な成果が出ていない。今後は、SDGsの実現に向けて、小さなアクションでも行動できる人材を育成する授業を実現したい。

【参加者の感想】

・参加者の条件がそろえばこんな試みもできるんだなと思った。うらやましい。

【まとめ：実践者の学び・気づき】

セッションの参加者より、プレゼンテーションがあまり高い評価を受けていないことへの質問が出された。その点については、発表者は注視していなかった点だが、今後の授業でどうすればより効果的に行えるのか工夫が必要だと感じた。限られた時間での発表だったので、十分に伝えることができない点もあったが、発表準備を行う過程で、SDGsの実現に向けて、学び、考えるだけでなく、小さなアクションを起こせるよう受講者に促せる変容学習を目指したいと、改めて考えた。

【報告者】 田村美香

国際協力NGOの 社会的実践への市民の参加機会

発表者：三宅隆史（シャンティ国際ボランティア会）

日時：2月21日（日）14:30～15:00 参加人数：20名

【プログラム概要】

国際協力NGO（以下NGO）の日本国内における役割の一つは、NGO活動への参加の機会を市民に提供することである。しかしそれは、募金や物品提供等の「協力」や報告会への参加等の「学習」に限られている場合が多い。一方、国内課題に取り組むNPOの多くは、協力と学習に加えて、社会的「実践」への市民参加を促している。これはNPOの活動現場は国内なので、実践への市民参加の機会を作りやすいからである。しかしNGOの場合、途上国でのワークキャンプ等の実践に参加できる市民の数は限られる。活動現場が途上国にあるNGOは日本国内で日常的に市民が実践に参加できる機会を創意工夫して構築しなければならない。そこで本研究は、①NGOは社会的実践へのどのような市民参加の機会を提供しているのか、②NGO活動への参加者にはどのような学びが生起しているのか、③社会的実践への参加による学びの組織化の構造は何か、の3点を二次データの分析とインタビュー調査によって検討した。当日は研究成果を発表し、討論を行った。

【実施内容】

1) 研究成果の発表

①NGOによる社会的実践への参加の機会は以下の3種に分類される。

- a. 事務局支援ボランティア。これは主体性は低いが、持続性は高い。
- b. 被災者支援ボランティア。国内事業にも捉えられるが、別枠とした。シャンティ国際ボランティア会では、東日本の震災支援の際、ボランティアの方がスタッフよりも長い期間活動に従事し、ボランティアが活動を主導するような逆転現象もあった。
- c. 自主的ボランティア。これはさらに、自主グループによるもの、国内事業のボランティア、国内事業に必要な教材などを作るボランティア、アドボカシーへの参加の4種類に分類される。

②参加者の自己変容は、インタビュー調査の結果から、a. 視野の多様化と広がり、b. 地球的課題への関心、c. 自己効力感の醸成の3つの変容が生起していることが明らかになった。

③社会的実践への参加による学びの組織化の構造については、a. 効果的で共感性の高いNGOによる社会的実践、b. ボランティア活動の組織化と調整、c. ボランティア活動の居場所化、d. 参加者に対する実践の成果のフィードバック、が行われていることを明らかにした。

2) 自由討論

Q. 中間支援とネットワーク組織を調査対象から除いた意図は？

A. ネットワーク組織や中間組織はNGOを支援するNGOであり、本研究の対象は、海外に活動現場を持つNGOであるため外した。

Q. 参加者側から見た自己変容だけではなく、NGO側から見たときのフィードバック・目的はないか。参加者側に置いた理由は？

A. 実践に役立てる調査となった場合は、NGO側の視点も必要になるだろう。NGOも学びの機会を提供しているのではないかという視点から今回の調査をした。ただ、インフォーマントからは、国内でのボランティア活動を広報するためのビデオを作り、youtubeに載せたらどうかという提案もいただいた。

【まとめ】

活発な討論が行われ、今後の研究課題として、事務局ボランティアの自己変容を明らかにすることがあげられた。

【報告者】 三宅隆史

コロナ禍における オンライン活動実践

発表者：鈴木 洋一 (Wake Up Japan)

日時：2月21日(日)15:15～15:45 参加人数：約15名

【プログラム概要】

新型コロナウイルス (COVID-19) の影響は多くの人々の生活に影響を与えました。物理的に集まることが制限される中でも、オンライン環境を生かして様々な活動が行われた。社会教育団体 Wake Up Japan では、2020年3月以降、毎月様々なオンラインイベントを開催した。その中で、オンラインで開催することの可能性やこれまでのリアルなイベントの際に見落とされがちだったファシリテーションの技術などを発見した。実践・研究報告では、Wake Up Japan での活動の中での活動やその中での学びを参加者と一緒に分ち合った。

【実施内容】

1) 打ち合わせ

実践報告開始10分前に行われる主催団体の方との打ち合わせも公開し、オンラインイベントを開催する際の手順として、「講演担当が断線した場合の措置」「途中参加の人がいた場合のサポートは誰が行うのか」「チャット機能を用いて、引用資料のリンクの紹介を行う」「BGMを企画の参加対象を念頭に選びかけること」などの手法を提示した。

2) 事務連絡と安心の場づくり

実践報告では、Wake Up Japan のオンラインイベントで行っている、チャットの使い方などの事務連絡、続いて、安心して参加するための場の確認をした。

3) コロナ禍での学び

コロナ禍における Wake Up Japan のオンライン活動を始めた経緯と1年で70回以上のオンラインイベント運営経験からの学びの分ち合いを行った。

オンラインでの実施によって地理的な要因でこれまで参加することが難しかった人の参加が容易になったこと、また、Wake Up Japan では、オンラインイベントはギフトエコノミー(カンパ制)で行うことが一般的であるため、経済的な障壁が低くなり、中高生世代層などの参加が増加したことが報告された。一方で、PCやスマホなどの設備を所有していること、インターネットへのアクセスがあること、コンピューター操作の可否などによって参加できない方など、オンラインでも排除されてしまっている人の存在についても留意点としてあげられた。

これまでの学びとして、オフラインで行うイベント以上にファシリテーション技術が試されることも共有された。オンラインイベントでは、参加者の安心などを視覚情報からのみ判断することが難しい

ため、合意の確認、参加者一人ひとりの権利について丁寧に確認をすることの必要性やブレイクアウトセッションなどで別れる前に明確に行うことを伝えることを含め、事前にイベントの設計を詳細にしておくことが求められることが伝えられました。さらにオンラインイベントを効果的に行うための留意点や Zoom 以外のオンラインツールについての紹介も行われた。

また最後には、社会教育団体として、上記に挙げたようなオンラインの利点を考慮したうえで、コロナ後には、イベントをオフラインで開催する場合は、なぜオンラインではないのかを明確にしていき、実際に会うことの意味や企画上の効果を明確化することの重要性について提起を行った。

【参加者の感想】

「具体的に企画されたオンライン活動に参加してみたかった」「オンライン活動の良さとデメリットがわかりやすく説明されて良かったです」「鈴木さんの、参加者に対する配慮とやさしさはずっと変わらないなあ、と思いました。見習わせていただきます」「知らなかったアプリを教えてもらい、参考になった」「リソースの紹介がたくさんあり有難かった」「オンライン実践の tips を知りたかった」



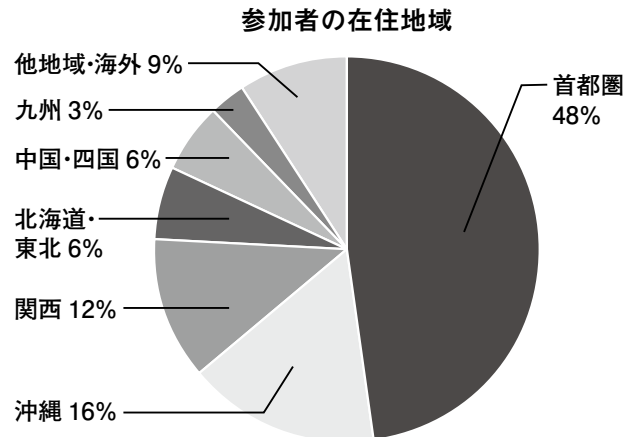
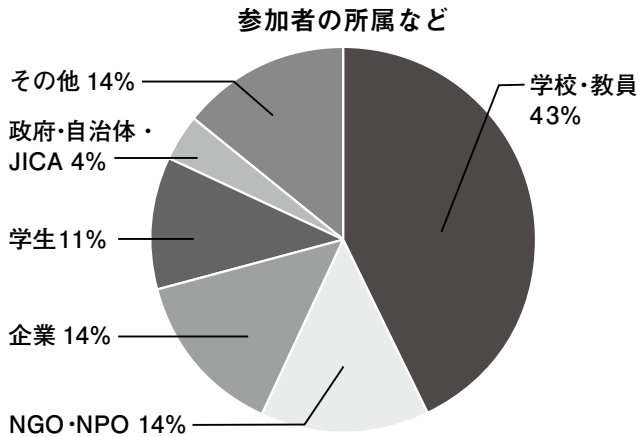
【まとめ：実践者の学び・気づき】

これまで社会教育を実践していく中で、社会問題についての学びを高めるために内容を作りこむことに注力しがかったが、オンラインという手段が変わったことで、安心の場づくりなどその学びに参加する一人ひとりの環境整備により意識が高まった。また、社会教育を行う上で、現地を訪れることや直接会うことの価値を妄信するのではなく、その本質的な価値や意味を問い直す機会になった。

【報告者】 鈴木 洋一

■参加者情報

参加者数：183名（講師・スタッフ・ボランティア含む）

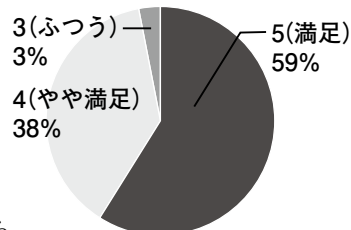


■アンケート集計結果

【1日目：2月20日（土）】

回答数：37名

一日を通した参加者の満足度



気づきや学び、収穫、感想など

・沖縄の歴史や文化を学びながら、それらを守ることの大切さと大変さに気づくことができました。（会社員）

・「沖縄の生き方そのものが平和的」琉球王国の時代から変わらない姿勢に改めて感銘しました。（高校教員）

・よくニュースで話題になること、自分たちの身の回りの生活などの向こう側にある問題に目を向けられたような気がします。きっと氷山の一角で、犠牲の種類は人の分だけあると思いますが、社会に世界に置き去りにされた人たちの声をもっと消費者側が、先進国と呼ばれている国側が聞かないといけなと思いました。（学生）

・全体会を通して「教育」とは希望であるということを感じたこと、自分が携わる仕事の中での課題を考えられたこと。いつもこういう場に、「答え」を求めて参加しがちですが、そんな簡単に答えはできません。でも、同じように試行錯誤してみなさんが希望を持って教育に携わっている姿を見られるだけでも、力をもらいました。（団体職員）

・生きているだけで素晴らしいことなんだと感じられる社会、誰の命も大切にされる社会をつくろうと真剣に考えて、実践している人たちと同じ時間を過ごせたことが収穫でした。（団体職員）

・私自身が過去のことと思っていた沖縄の歴史（方言、民族など）が今の世代にも強く影響していることに驚いた。（学校教員）

・地元沖縄のことをまだよく知らない。人に伝えるためには、まずは

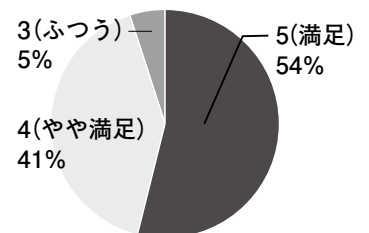
もっと知ることが必要だ、と気付きました。（高校教員）

・現在、何もかもがオンライン講座となっていますが、その中でも工夫をしながら、参加型で学ぶこと、話し合う、対話するということの大切さを改めて感じました。（NPO・NGO）

【2日目：2月21日（日）】

回答数：46名

一日を通した参加者の満足度



気づきや学び、収穫、感想など

・意見交換の折々に、意識の高い人たちが集まっていることを改めて感じた。自分への栄養補給になった。（高校教員）

・「教育」ということで市民社会だけではなく教員の方のご参加も多く、立場の違う方のお話を聞いたことが新たな学びとなりました。（NPO・NGO）

・参加者からの「プラスチックじゃないものをさがすのが難しい」の一言。自分の生活とプラスチックを考えるきっかけになった。（NPO・NGO）

・やはり今日は「ひめゆり」のワークショップが一番印象深い。オンラインでも、これだけのことができるということに感銘を受けた。ありがとうございました。（高校教員）

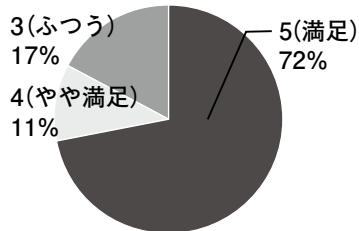
・人が生きていく中で大切なものは何だろう？という問いがすべてにつながっていくように思いました。また、短い時間ですが参加者の方とグループで話す中で教わることも多く対話の大切さも実感しています。（日本語教育関連）

- ・オンラインでも、沖縄からの熱量が伝わってきました。人権の大切さ、人を責めすぎないこと、それでも希望を捨てないこと、沖縄に詰まっている秘密をもっと知りたくなりました。(団体職員)
- ・まだまだ知らないことがいっぱいあります。学びは「知る」ことから。(大学教員)
- ・プラゴミ問題にせよ、フェアトレードにせよ、身近に多くの問題があり、それに目を向け自分なりに考え、そしてアクションを起こすことの重要性を再認識しました。今日学んだソーシャルアクションを参考に、必要な場合は問題解決に向けて行動したいと思います。(高校教員)
- ・プラゴミというグローバルな問題から学生グループがお持ちのローカルな課題まで、さすが d-lab という一日でした。(高校教員)

【3日目：2月22日(月)】

回答数：18名

一日を通した参加者の満足度



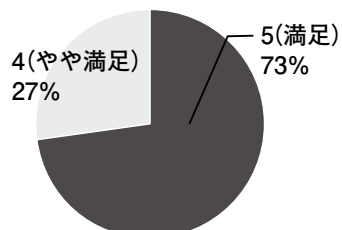
気づきや学び、収穫、感想など

- ・沖縄の空気や人との交流を味わうことができました。構成やカメラワークも工夫されていて、おもてなされている感がありました。(NGO・NPO)
- ・とても臨場感があり、まるでその場にいるかのように楽しめた。(大学教員)
- ・沖縄の雰囲気を楽しむことができました。今日は特に初夏を思わせるような明るい日差しに包まれて、現地を訪れた気分になれた。(行政職員)
- ・直接、生活している方からの話を聞いたことがよかったです。沖縄はここ数年何度も行っているのですが、沖縄の人と個人的に親しくなる機会はなく、旅行者という立場から抜け出せていなかったのです。次回、行く時はNGOセンターなど訪ねてみたいです。(学校教員)
- ・オンラインでの体感ツールを学びたかった 予想以上に臨場感があり楽しかった。景色や観光スポットではない沖縄の古き良き文化や生活、人に触れることができました。眞榮里さんの地元愛と真摯な解説に感動しながら新里さんとのやりとりが絶妙だった。そんなところに今回のぬちぐすいまちまーいオンラインツアーの素晴らしさと満足感があって感じた。本当に最高でした!(学習支援関係)
- ・オンラインスタディツアーの参考にもなりました。(NGO・NPO)

【4日目：2月23日(火・祝)】

回答数：43名

一日を通した参加者の満足度



気づきや学び、収穫、感想など

- ・日頃持っている疑問、もっと

よくしたいという思いを他の人々と共有することで、次の一步を踏み出そうという意欲が持てた。(行政職員)

- ・沖縄にご縁のある人はみんな『ウチナーンチュ』と仰られていたこと。多様性を受け入れ、寛容な心・社会となるように、自分にできることを考え、実践につないでいきたいです。(団体職員)
- ・人間はみんな同じ一人の人間であることを実感しました。どんな言葉を話すか、どんな国に生まれたか、どんな文化を背景に持つかはそれぞれ違う点ではあるけれど、その違いに優劣はなくてみんな同じく生きている。その根本を尊重しあうことが重要だと感じました。争いや憎しみ、差別、偏見など悲しい出来事ももちろんたくさんあるけれど、権利を持った一人の人間だということを思い出せば、そういった負の感情から抜け出すことができるのではないかと感じます。今という時代と一緒に生きている縁を大事にしたいなと思いました。(学生)
- ・気候変動やSDGsの取組みが、各地で行われたり、考えられたりしていることに励まされた。(大学教員)
- ・沖縄の移民の歴史、うちなーんちゅ、豊かな自然と様々なことを学ばせていただきました。大会テーマにもあるように「ぬちどう宝」が基本にあるように思います。
- ・社会的公正は難しい話ではなく自分とつながりがあり、自分が加害者にも被害者にもなりうる前提であるということに気づいた。(団体職員)
- ・3日間参加しましたが、どの日も内容が濃い。まだ整理はできていませんが、確実に引き出しが増えました。すぐに試してみたいテーマもありましたし、参加してよかったとつくづく思いました。ありがとうございました。(高校教員)
- ・社会をより良くしていくための仲間、新たな人との繋がりが得られた。(NGO・NPO)

【オンライン開催に関する意見・感想など】

- ・実際に沖縄での開催だったら参加できていたかわからないので、オンラインという形で行われたおかげで参加することができました。今後も実際に現地での開催が一番ですが、オンラインでの参加も可能になるような新しい形ができていくと嬉しいです。(日本語教育関連)
- ・また対面でやれる機会を祈ってます。こんな大規模な企画をオンラインでも開催してくださり、実行委員会の皆さんへのリスペクトと感謝でいっぱいです。(団体職員)
- ・オンラインでの運営は色々大変だと思いますが、家から沖縄を感じながらの学びの機会が持てたことに感謝です。(日本語教員)
- ・オンラインで開催できたことはよかったと思いますが、参加者同士の交流が難しいので、寂しくもあります。画面に知っている名前があっても話しかけられなくて。(高校教員)
- ・沖縄現地での開催を何年後かに又できればと感じます。(高校教員)
- ・慣れないオンライン開催お疲れ様です。全国各地、場合によっては外国からの参加もあり、オンラインならではの交流があつてとても楽しく学ぶことが出来ました。有り難うございます。d-lab は初めての参加ですが、来年以降も参加したいと思います。(高校教員)

d-lab2020 実行委員会の開催

1. d-lab の開催時期の変更と「d-lab 学びの会」の実施

d-lab2020 は、当初 2020 年 11 月に沖縄の会場にて実施予定だったが、新型コロナウイルス感染症の影響に伴い、2021 年 2 月に全面オンラインでの開催となった。

d-lab の開催延期を受けて、DEAR や開発教育への関心を広げ、実行委員会や d-lab への参加を促すことを目的に、沖縄 NGO センターと共催で「d-lab 学びの会」を 8 回開催した（JICANGO 等活動支援事業）。沖縄で開発教育などに取り組む団体を中心となり、作成途中の教材などをファシリテーターとして共有し、参加者からフィードバックをもらう形で実施した。オンラインではほぼ毎月継続して開催できたことにより、沖縄 NGO センターをはじめ沖縄関連団体とのつながりを広げ深めることができた。

2. 実行委員会の立ち上げ

d-lab2020 の企画・運営に際し、d-lab2020 実行委員会を 2020 年 10 月に立ち上げ、6 回開催した。実行委員メンバーは、沖縄 NGO センターからの呼びかけを中心に、沖縄県内で開発教育や国際理解教育、多文化共生や SDGs に関わる取り組みを行っている個人や団体、合計 22 名（事務局含む）が集まった。

3. d-lab 学びの会および d-lab2020 実行委員会の開催記録

● d-lab 学びの会、◇ d-lab2020 実行委員会、□ 関連事業

時期	内容
2020 年 3 月	◇ 第 1 回実行委員会（委員の顔合わせ、d-lab の趣旨説明ほか）
4 月	● 第 1 回学びの会「新型コロナウイルスと私たち」（開発教育協会）
6 月	● 第 2 回学びの会「開発教育入門講座～パーム油のはなし」（開発教育協会） □ 慰霊の日ワークショップ（沖縄 NGO センター）
7 月	● 第 3 回学びの会「世界のウチナーンチュ・沖縄移民」（沖縄 NGO センター）
8 月	● 第 4 回学びの会「多文化共生～コロナ禍で出会い、生まれたコト」（多文化ネットワーク fu ふ！沖縄／大伸るみ子）
9 月	● 第 5 回学びの会「水に流せない水のはなし」（JOCA 沖縄）
10 月	◇ 第 2 回実行委員会（委員の顔合わせ、d-lab の趣旨説明、d-lab 企画についてほか）
11 月	● 第 6 回学びの会「すいまーる・南の島の水とくらし」（琉球大学／島袋美由紀） ◇ 第 3 回実行委員会（全体テーマやプログラムの内容検討）
12 月	● 第 7 回学びの会「のぞいてみよう～街なかマングローブ、生き物、人のくらし」（NPO 法人おきなわ環境クラブ／金城明子） ◇ 第 4 回実行委員会（テーマやプログラムの内容検討、広報方法の検討）
2021 年 1 月	● 第 8 回学びの会「伊江島・土地闘争の非暴力の闘い方から、現代の私たちは何が学べるか」（一般財団法人わびあいの里／渡嘉敷紘子） ◇ 第 5 回実行委員会（プログラム詳細検討）、ZOOM 接続・発表練習会
2 月	◇ 第 6 回実行委員会（当日の役割分担等の確認、報告書執筆依頼） d-lab2020 開催（2 月 20 日～23 日）
3 月	◇ 第 7 回実行委員会（ふりかえり） □ 沖縄人材育成研修会 SDGs 教育連携会

4. 委員一覧

	名前	所属
1	池田(渡嘉敷) 紘子	(公社) 青年海外協力協会 (JOCA 沖縄)、(一財) わびあいの里
2	内山 直美	南風原町立南風原中学校
3	大仲 るみ子	多文化ネットワーク fu ふ! 沖縄
4	オジャ ラックスマン	沖縄ネパール友好協会 (ONFA)
5	金城 明子	NPO 法人おきなわ環境クラブ
6	金城 さつき	大学非常勤講師
7	古賀 徳子	ひめゆり平和祈念資料館
8	島袋 美由紀	琉球大学博物館 (風樹館)
9	新里 聡	株式会社国際旅行社
10	田名 彩子	町の自習室 (首里城下町クリニック内)
11	根間 広人	NPO 法人沖縄ハンズオン
12	宮里モラノ・ジュン	NPO 法人沖縄ハンズオン
13	屋比久 カルロス	コザインターナショナルプラザ (KIP)
14	屋良 真弓	南風原町立南風原小学校
15	玉城 直美	NPO 法人沖縄 NGO センター (ONC)、沖縄キリスト教学院大学
16	奥山 有希	NPO 法人沖縄 NGO センター (ONC)
17	新膳 朋子	NPO 法人沖縄 NGO センター (ONC)
18	佐々木 綾葉	NPO 法人沖縄 NGO センター (ONC)
19	仲村 明	NPO 法人沖縄 NGO センター (ONC)
20	島袋 真七	NPO 法人沖縄 NGO センター (ONC)
21	中村 絵乃	認定 NPO 法人開発教育協会 (DEAR)
22	岩岡 由季子	認定 NPO 法人開発教育協会 (DEAR)



5. 実行委員の振り返り

第7回実行委員会では、ふりかえりを行った。以下、ふりかえりのコメントを一部紹介する。

1) d-lab 実行委員会に参加する中で、気づいたことや学んだこと

- ・多くの方と関わる機会が持てて、開発教育の可能性を感じた。
- ・教育の開発に向けて、真剣に熱い信念を持って取り組んでいる方々が多いことに刺激を受けた。
- ・開発教育の奥深さや可能性。人と関わり、対話がうまれ、世界が広がること。その良さを知っているみなさんがたくさんいること。
- ・実行委員それぞれが沖縄に対して持つ、問題意識や展望などから気づかされること、学ぶことが多かった。「命どう宝」のテーマから、宝である「命（魂）」の尊厳を様々な視点から考えることができた。d-lab 学びの会のおかげで安心感がありました。
- ・オンラインで会を重ねていくことの不安もあったが、オンラインでも連携とつながりを作れることを実感した。
- ・事務局のスケジュール管理、業務の役割分担がしっかりしていた。それと、個々の発表者に対するプログラム内容の的確なアドバイスなどの心配りが素晴らしい。一人一人に対する対応のやりかた（思いやり）がもっと必要だと気づいた。
- ・テーマが沖縄だったので身近ではあったが、沖縄をより深く知るいい機会になりました。進行の流れや記録のとり方などこの実行委員会の体制が本当によくできていて、個人的には初めて関わる未知のイベントではあったものの、問題なくスムーズに参加することができました。

2) d-lab 実行委員会に参加する中で、疑問に思ったことやもっと知りたかったこと

- ・もっと良いすすめ方があったか。各プログラムについて、d-lab の従来の枠に当てはめようとしてしまっていなかったか。実行委員会でもっと意見を共有するための進め方があったか。
- ・d-lab 学びの会でも参加できなかったプログラムがあり、参加してみたい気持ちになりました。

3) 「d-lab のプログラム」を企画・実施する中で、気づいたことや学んだこと

- ・実行委員に参加し話を詰めていく過程（皆さんの話）から、企画への思いや考えを学ぶことができた。組織の方向性がブレることなくプログラムとして形づくられていく過程は大変勉強になった。
- ・プログラム企画と構成、コーディネーターという立場で参加させてもらい、案内ガイドを別の方々にお願いしてというところで、自身が想定していた企画内容よりも2倍、3倍にも面白くなっていった。その魅力を一緒に作り上げることで相乗効果がでるというのを学ばせていただいた。
- ・こんなにも多くの方々が沖縄に興味関心を持っているのだと驚いた。参加者の方から「沖縄の課題は県外にいる私たちも自分事だとして考えるべき」という意見に改めて考えさせられた。日本全国のありとあらゆる課題に関して、自分たちが知り、少

しでも考え、行動に移すことこそ、世界で目標とするSDGsに繋がるのではないかと気づかされた。

・プログラムを企画することで、思考することや人と関わるチャンスが生まれ、理解が深まった。自分の変容につながった。

4) 「d-lab のプログラム」を企画・実施する中で、疑問に思ったことやもっと知りたかったこと

- ・自分自身、もっと開発教育について学び、参加することが必要だと思った。
- ・短い限られた時間のなかで、議論を深めることの難しさを感じた。
- ・東京と沖縄の分担や負担感がお互いに見えにくくなることがあったのかなと思う。

5) 開発教育やSDGsに関して学んだことやもっと知りたかったこと

- ・d-lab 学びの会を通して、関わる人たち自身の参加型の姿勢や、そもそも実行委員の方々との開発教育に関する学びをもっと深めたかった。開発教育を実践しているといっても、それぞれやり方が違う中で、互いにどこまで尊重しあってできたかが疑問です。
- ・沖縄の開発課題を、日本の課題として考えて受け止めるために、歴史や文化、開発などについて沖縄県外での学び方が重要である。
- ・「レヌカの学び」をアレンジした「〇〇の学び」の活用方法や地域での実践案等、それをどうつなげられるか、をテーマに話し合うことができたならよかった。
- ・「ある人」の人生を通して学ぶ教材やワークがあれば知りたいです。
- ・SDGsについて学ぼうという意欲がわきました。
- ・発表者の多様な視点があり、様々な開発的な教育を深め進めていくアプローチ方法があることを学んだ。
- ・小さいことでもいいので具体的な取り組み（好事例）をもっと知って参考に実践していきたい。

6) これからやってみたいこと

- ・沖縄NGOセンター独自で開発教育をゆっくり進めていきたい。勉強会などを通して、スタッフ自身の学びをもっと深めたい。
- ・教職員を巻き込んだSDGsの学びあい。
- ・d-lab 学びの会はぜひ定期的に続けていきたい。
- ・ワークショップ×沖縄戦が方法的にも内容的にも深まっていくといいなあとと思っています。
- ・私のなかのThe SDGs「金城キク」さんの生き方や社会との関わり方をテーマにしたワーク開発をしたいので、もっと勉強したいです。
- ・観光と開発教育など、今回繋がった企業や団体でプログラムを共同企画できたら楽しそうですね。
- ・定期的なイベント等の開催、やそれぞれの活動のデータベース化の後、可視化して活動を広め合う、広報し合う仕組みづくり。

・プログラムの実践。まずは社内向けに行い、高校生等対象に少しアレンジを加えて平和学習に訪れる県外の生徒に試したい。

・旅を通じた学び (SDGs や平和、ジェンダーなど他多数) のテーマで、皆さんと企画立案からの共創できると良いなと思います。

・日ごろの仕事やガールスカウト活動などの中で SDG s の紐づけ+好事例を参考に更なる実践を考え実行することの“仕組みづくり”をしたい。

～ d-lab2020 実行委員会の皆さま、大変お疲れさまでした！～

d-lab2020(第38回開発教育全国研究集会) 報告書
「ぬちどう宝を育む学び」

発行日：2021年3月22日

発行：特定非営利活動法人 開発教育協会（DEAR）

〒112-0002 東京都文京区小石川 2-17-41-3F

TEL: 03-5844-3630 FAX: 03-3818-5940

E-mail: main@dear.or.jp URL: <http://www.dear.or.jp>

編集・作成：岩岡由季子、中村絵乃（DEAR）

デザイン：キシタカユキ

助成：一般財団法人 日本国際協力システム

本書の著作権は、(特活) 開発教育協会に帰属します。

著作権法上の例外を除いて、本書の全部または一部を無断で複製(複写・転載・引用・入力)することを禁じます。

